

『古事記』と『万葉集』のチェコ語訳について

—異文化間の翻訳について—

カレル・フィアラ

本日は、古代日本文学作品をチェコ語に翻訳するときに生じる様々な問題についてお話ししたいと思います。

ソース言語の文化とターゲット言語の文化

『古事記』や『万葉集』のような、純粋に日本的な作品を他の文明圏の言語に適切に翻訳することは異文化理解のために非常に重要な作業です。

翻訳論では通常、ソース言語とターゲット言語を区別します。ソース言語の文化がターゲット言語の文化から地理的に、時代的に遠く離れている場合、翻訳作業において様々な特殊な問題が生じます。そのため、ソース言語の文化的・言語的な特性をターゲット言語の文化的・言語的な特性と対比して、詳細に検討することが望ましいと思います。翻訳作業においては、ソース言語の文化とターゲット言語の文化の個性を双方とも生かせ、バランスの取れた翻訳法を探るべきでしょう。

今回紹介する『古事記』・『万葉集』の翻訳の場合、ソース言語は上古日本語で、ターゲット言語はチェコ語です。

古代の古典文学作品を遠く離れた言語に翻訳する時は、ターゲット言語文化への過剰な接近を慎重に避けなければなりません。このような過剰な接近を「ドメスティケーション」と呼びます^①。

古代日本語から他言語への翻訳を進めるときは、原文の用語をそのままターゲットの言語・文化固有の西洋的な語彙（windows、bed、wardrobe など）に置き換えるのではなく、ただ大雑把な意味を暗示する訳語を選ぶだけで、原文の正確な意味を傍注の中で説明することが望ましいと思います。

一方、この冊子の主なテーマが『万葉集』で、そのソース言語が上古日本語であるからといって、ターゲット言語文化の説明を省略してもよいではありません。両文化の歴史を注意深く検討しながらも、ターゲット文化の背景を理解することが必要です。

考察

日本とチェコ両国では、文字は宗教・思想とともに国外から持ち込まれました。日本の場合、漢字は仏教、儒教や道教とともに導入されましたが、一度持ち込まれると、国内文化についての記述にも幅広く応用され、神話、説話、日本史の記述や、歌謡・和歌などを表すのに使われます。

『古事記』、『日本書紀』、『風土記』やその逸文、『先代旧時記』、『倭姫命世紀』などをみると、この時代にはまだ全く同じテーマについて「和文」も「漢文」も幅広く使うことができました。

つまり、テーマによる明瞭な区別はまだありませんでした。あるいは少なくとも形成中でした。

平安時代以降になると、漢文と和文の適用領域はより鮮明に分けられますが、紀貫之の例からも分かるように、日本の文学作品の執筆者が漢文と和文からの選択を「不適切に」行っただけで、命を失うほどの危険にさらされることはなかったのです。

一方、ヨーロッパの文化史では、状況は大いに異なります。

現在のチェコの地では日本と同じく、特有の文字体系が成立したのではなく、初めての文字は遅くて

も九世紀に、宗教（キリスト教）とともに導入されました。

ところが、キリスト教化されたヨーロッパでは九世紀に、聖書を翻訳するのに相応しいと思われた言語と、日常のコミュニケーションに相応しいと思われた言語との間に、いきなり深い亀裂が開かれました。また、東西ヨーロッパの間にも、神の子キリストの神格についての論争が展開するとともに、この亀裂はさらに深まりました。

特に西欧の立場としては、万一、聖書の翻訳に不適切な言語を使うと、「諱」のように、禁止語である神の名の冒涇になるという、一般信者の立場からやや離れた考え方が強まります。ローマを中心とする西ヨーロッパでは、聖書を許容されない言語に自由に翻訳することが徐々に規制されてゆき、その違反はしばしば厳しく罰せられることになりました。

西欧では中世に、また近代の始めに、聖書を独断で翻訳する人が死刑されたり、また未承認の聖書翻訳が没収されたり、焼却されたりすることがありました。

ローマ・カトリック教に所属する諸国では、聖書の翻訳を厳しく規制することは特に十一世紀後半から、ほぼ十五世紀中期（ドイツのグーテンベルク J. Gutenberg が 1450 年代に訳した独語版の活字印刷）⁽²⁾まで自由にできませんでした。エラスムスは 1516 年、ルターは 1522 年に聖書を翻訳しました。

イギリスでは、聖書を翻訳した「ティンダル」(W. Tyndale 1494-1536) が処刑されましたが、その数年後に、彼の聖書 (1526) は遂に正式に承認され、名声を獲得しました。

一方、ヨーロッパの発展とは対照的に、日本の思想史では天の秩序と地の秩序との絶対的な対立はすでに上代から、天神降臨神話の成立によって緩和されたとみることができます。

ヨーロッパでは段階的に、東西キリスト教の分裂、ルネサンス思想の展開、ロシア正教（十五世紀の三十年代以降）の確立あるいは西欧の活字印刷の普及にともない、各民族の言語による聖書の翻訳が遅かれ早かれやっとな確立しますが、許可された言語としては、共通語と、宗教・思想の言語と、そして文芸を含む芸術の言語との間に深い溝が長く残りました。

さらに、西欧と中欧では、「小民族」は様々な特殊な問題を抱えています。「小民族」の言語とみられる文化が確立することは自然であり、当然なプロセスであったのではなく、以下で示すように、外国文学の翻訳作業は、小民族の文化生活では大変重要な役割を果たしました（以下詳細）。

「小民族」が一般に認められるまでのプロセスは、日本の「言文一致」より数百年も早く始まりましたが、「言文一致」より遥かに困難であり、非自明であります。そのため、チェコの地ではこのプロセスのために多くの犠牲が払われ、多くの人生が失われました。このような民族の形成は十八世紀にはじまったのではなく、数百年も前から芽生えたことが明らかです。

1. ターゲット文化であるチェコ語の文化について

一九一八年から一九九二年末まで、チェコスロヴァキア共和国という国家がありました。このチェコスロヴァキア共和国は、八世紀から十世紀まで存在した独立国家「大モラヴィア」の再生であり、その伝統を受け継ぎました。

一九九三年初頭になると、チェコスロヴァキア共和国は平和的に、チェコ共和国とスロヴァキア共和国に分離され、二つの、自主権のある民族国家が誕生しました。チェコ共和国の人口は 1,054 万人で、その約九十五パーセントの住民はチェコ語を使っています⁽³⁾⁽⁴⁾。

チェコ語は現在、西スラヴ語派最西端の言語の一つであり、チェコ共和国の唯一の公用語です。またある国の公用語としては、チェコ語はこの最西端のスラヴ言語のある地域の唯一の国語です。チェコ語を使用する住民の内、約九〇・四パーセントの住民が自分はチェコ民族の意識、三・七パーセントの住

民だけがモラヴィア民族の意識、そして一・九パーセントはスロヴァキア民族の意識を持っていることを申告しています。

チェコ共和国はほぼ単民族国家にあたり、チェコ語はこの国家の標準語で公用語であるだけでなく、話し言葉の共通語でもあります。

一方、DNA やミトコンドリアの解析によれば、チェコ共和国の住民のうち、約十パーセントの住民の先祖だけが三百年以上前から連続的にこの共和国の領土に住んでいます⁽⁵⁾。

大陸の横に位置する日本列島、インドネシア群島あるいはブリテン諸島とは対照的に、チェコ共和国の領土はヨーロッパの真ただ中に位置し、正に、「ヨーロッパ大陸」の幾何学的中心点（ソコロフ市周辺）を内含しています。

文化史的には、チェコ共和国やスロヴァキア共和国の領土は西ヨーロッパの文化と東ヨーロッパの文化の狭間にあります。古代以来、多くのエスニックがヨーロッパの各地からこれらの地に移住してきましたが、他所への移動も盛んでした。

さらに、先述の、現在進行中のチェコ共和国住民のゲノム解析によると、チェコ領の住民は長期期間にわたって東ヨーロッパよりも西ヨーロッパと強く結ばれてきました。たとえば、チェコ住民のゲノムは、他のスラヴ諸民族と共通する遺伝的情報の約四十パーセントにとどまっていますが、古代のケルト族の要素が多いブリテンの住民と共通するゲノムの属性は、五十パーセントを超えています。さらに、ブリテン住民のうち、特にアイルランドとウェールズ、またブリテン以外には、フランスの西南海岸域（ブルターニュ地方）やポルトガル・スペインの西海岸域と多くの遺伝的要素が共通することが報告されています。（この情報の正確な解析とその解釈の作業はまだ進行中です。）⁽⁶⁾

チェコとスロヴァキアの地は古来、中欧地域に所属する特徴を持続し、西欧と東欧の対立を和らげ、欧州両端間の橋渡しとして機能しています。これらの領土では、激戦あるいは虐殺が長期に続いたという情報がないため、住民の文化に古来の連続性があり、太古に生まれた地名、故事や歌謡の大きな部分は原始時代の古昔から引き継がれています。

ターゲット文化（チェコ共和国領の文化）の原始時代

現在のチェコ共和国の領土（正式に、“Čechia”と呼ばれています）は、西方では「ボヘミア（州）」（Čechy, Bohemia）と呼ばれる歴史的な地域（その古来の中心は古都プラハです）、また東方では、「モラヴィア（州）」（Morava, Moravia）と呼ばれる歴史的な地域（現在、最大の都市はブルノ市です）などから構成されます。

ボヘミアでは、ケルト系のエスニックは紀元前六世紀から、そのうちボイイ族（Boii, Boii= “Bóiové”）が紀元前四世紀末（第二期には、紀元前二世紀）から紀元一世紀の初期まで移住をくりかえしました。

またモラヴィア（や現在独立しているスロヴァキア）では、ケルト系のヴォルキ族（Volki, Wolki= “Vlaši”）⁽⁷⁾が紀元前に長く暮らしていたことが明らかになっています。

ヨーロッパ大陸では、「ケルト系」の古代文化（前ケルト・イタリックの文化）は中部オーストリア領では Halstatt（ハルシュタット）文化、スイス・イタリア領では La Tène 文化⁽⁸⁾を含み、西欧のスペインから中欧を経て東欧に向かい、現在の南ウクライナやルーマニアの地域まで広がっていたとみられます。（ただし、古代のトラキアやカザル国の領土をほぼ除きます。）

紀元一世紀前後には、ボヘミアの地にゲルマン語派⁽⁹⁾に所属したマルコマン族（マロブッド王や、彼を後に倒したコッタヴァルダ王）、またモラヴィアの地にはゲルマン語派のクアディ族（Quadi, Kvádové）とゲルマン語派のヘルムドル族（Hermudor, Hermudoři）が移動してきました。

「プラーグ域の陶器」という地層の発見から分かるように、スラヴ族は五世紀ごろ移住してきました。

彼らは、ここにかつて残っていたケルト族の文化遺産、また恐らく、ケルトの伝承を伝えた残りのケルト語派の住民と接していました。

そのため、ケルト族が残した集落、城郭(「オッピダ」)、ケルト民の宗教と関わる神聖な杜(「もり」、「やしろ」)、またその他のランドマーク(山、川等々)の地名や、これらの場所に関わる故事や地名を直接に、あるいはゲルマン化した形で承継しました。

チェコ共和国では、現在もケルト族の川の名が多く残っています(Labe = Elbe 川「白川」 — エルベ川、Vltava = Moldau 川「大川」 — ヴルタヴァ川、モルドー川、Ohře = Eger 川 = Agara「鯉河」、Jizera = Eser < Isar 川 — イゼラ川ですが、Jizera 川の地名についての多くの語源説があります)。

一方、ドナウ川(Dunaj=Danube = Dunaj 等 < * Dánú⁽¹⁰⁾ = 「液」、「滴」、「川」あるいは「境」、「垣」)の地名はほぼ確実に、この川の西岸に広がっていた印欧語族の語彙であるとみられます。

ボヘミア領と関連する説は特に、ケルト語派の rip (山、岡)⁽¹¹⁾に基づくと思われる地名(チェコ語では Říp — ルジープ山)と関連しています。

また、Kazín⁽¹²⁾ (Kazi の城壁)の名もあります。

一方、Krkonoše 山脈は、古代の伝説で言及される Krok という人名と関連すると思われます。チェコの地でケルトのオピドウム Rokycany 域で 1777 年に発見された⁽¹³⁾コインに、古代のケルト族の指導者 Crocco の肖像があり、その名が彫り込まれていますので、Krok と同語源であると考えられます。またチェコの Krakovany 町、ポーランドのクラクフ = Kraków 市、クロアチアの Krakov 市などもすべて同語源でしょう。(ケルト語派の o はゲルマン語派では a に変化するので、「Krok」が「Krak」に変化した可能性があります。)

また、チェコ地の古代の占い師で、女公でも、「巫女」でもあったと信じられるチェコの伝説的な女公 Libuše (Lubuša = 「可愛らしい人?」)の名も、アイルランドの女神 Li Ban⁽¹⁴⁾ (「女性たちの模範的で、理想的な美女」)と関連するといわれています。また、これと類似する地名はウクライナの川にもあります。⁽¹⁵⁾

十一世紀以降にキエフ・ロシアで成立した『原初年代記』(『Повѣсть временныхъ лѣтъ』)⁽¹⁶⁾の中でも、リビッド(Libid)という女性の人物と同語源の川の名がみられます。

また、チェコ語学者 B. Havránek⁽¹⁷⁾によれば、Čech (チェコ人) (< * gent ?) とは本来、člověk (人間) という意味の一般名詞でしたが、これは伝説では、「指導者」あるいはその「元祖」とも解釈されました。チェコではこれらの伝説は十一世紀のラテン語の年代記で現れますが、類似の伝説はチェコだけではなく、ブルガリアやウクライナの伝説にも反映します。

ブルガリア、クロアチア、セルビアやキエヴァン・ロシアの故事は明らかに、チェコの古代伝説より新しい形を持ち、そこに現れる地名はボヘミアの地名と一致します。このように、スラヴ文化の中ではケルト文化の名残が生き続けています。

ソース文化(上古の日本文化)に含まれる原始時代の「階層」

ケルト族の時代の後に続いたゲルマン族の時代は、スラヴ語派の部族が五世紀か六世紀に到来する前に、つまり、約二〇〇～三〇〇年間に限定された期間に続きました。

一方、日本ではアイヌ族・蝦夷族⁽¹⁸⁾などの言語が縄文時代の古層に遡り、その時代の言語の影響を残す地名もあるとみられます。

約一万四千年間も続いた縄文時代に対し、弥生時代は約六百年、つまり、その約二十分の一の期間に限定されます⁽¹⁹⁾。

ターゲット文化（現チェコ共和国領の文化）と中世

—聖書の翻訳問題とヨーロッパの分裂—

紀元前約三百年ごろ、ヘブライ語の聖書（キリスト教聖書の旧約に当たる）を直接にギリシャ語に翻訳するという、大規模なチームワークの作業が始まりました。この翻訳は「セプトゥアギンタ訳（七十人訳）」⁽²⁰⁾と呼ばれています。ギリシャ語訳の聖書（旧約）が作成されました。

ビザンツ地域でコンスタンチノポリス（現イスタンブール）という町が紀元三三〇年に創設された後、この旧約聖書のギリシャ語訳は、紀元前後に成立したキリスト教の新約聖書と一緒に行われるようになりました。新約聖書の原文は、当時は国際的に共通していたギリシャ共通語（koiné κ ο ι ν ή）で書かれました。

しかし、西ヨーロッパの読者層は一般的にヘブライ語、ギリシャ語などの言語は知りませんでした。西ローマ帝国の共通語はラテン語で、ケルト語に近いものでした。

「西欧」地域の達成

紀元四世紀（紀元三八〇～四〇五年間に）、ローマ帝国の西部で、聖ヒエロニムス（St.Jerome）がラテン語訳聖書を完成させました。この翻訳は、ローマ・カトリック教会が中世以降にも、他のどの版よりも重視していた聖書です。

聖ヒエロニムスの母国語は東北イタリアのラテン語の方言でした。彼は旧約聖書をヘブライ語からラテン語に訳し、また、新約聖書をギリシャ共通語から翻訳し、ラテン語の、『Vulgata（ウルガタ＝国民共通語の訳）』⁽²¹⁾という版に纏めました。

ラテン語は本来、特に中欧・西欧で広がった印欧語族ケルト・イタリアック語派の一言語として発達し、約前七世紀の早い時代から普及し始めました。

紀元前からラテン語は、（後の西）ローマ帝国と接していたゲルマン族の指導者層の中でも知られるようになり、西欧の聖職者や知識人を広く結ぶ言語となりました。

同じ四世紀に、このラテン語の聖書は東ゲルマン族の Wulfilla 司教⁽²²⁾によってゲルマン語派の古代ゴート語に訳され、ケルト系の言語を知らないゲルマン語派の読者向けのものとされました。

『新約聖書』の最古の本文は、福音書の異本あるいはその断片が見つかったコプト語の巻物から知られていますが、紀元三六〇年ごろ、アレクサンドリア市の大司教が多くの異本を「誤ったもの」とし、破壊させ、焼かせました⁽²³⁾。

これによって、書の焼却を行った高祖前漢の漢王劉邦に次いで初めて、キリスト教会の中でも禁止された書が焼かれるようになり、先に挙げた「Vulgata」のラテン語訳は新しく選出された聖書の模範的な形式となりました。

全ローマ・カトリック教会の歴史を通じて、多くのカトリックの聖職者や他の信者が未承認版の没収・破壊を批判しましたが、先述のように、チェコ領ではチェコ語の宗教的な本を没収したり、焼いたりすることは十八世紀の半ばまで続きました。

五世紀末、西ローマ帝国が没落した後、ラテン語は帝国で依然果たしていた役割を失い、教養のある人間しか理解できない言語になり、どの版を、またどの言語に訳すべきかは重大な問題となされました。

スラヴ語派の言語によるキリスト教文化の形成と古教会スラヴ語の文化

紀元五世紀からチェコの地（現プラハ周辺）でスラヴ族の陶器が発見されます。『フレテガル年代記』

によると、七世紀にフランク出身の商人サモ（Sámo）がスラヴ人を統一し、アヴァル族の侵略や支配から解放し、また六三一年に、Vogastisburg（ドナウ川岸の Augusti 城か）でフランク国の襲撃を潰しました⁽³⁰⁾。

しかし、キリスト教化のプロセスではスラヴ族の言語による聖書訳や典礼訳の必要性が実感されました。

九世紀には、「大モラヴィア国」の Rastislav 公（国家の西方では Rostislav 公、スラヴ語では「成長する人」か）の依頼で、聖書はを初めてスラヴ語派の言語（「古教会スラヴ語」）に訳された形で普及されました。この翻訳作業に取り組んだのは、現マケドニア出身の聖キュリロス（Konstantinos、ギリシャ語では「変わらぬ人か」、別名聖キュリロス、ギリシャ語では「主」か）と聖メトディオス（Methodios、ギリシャ語では「旅をしてきた人」、あるいは「道を求めてきた人」か）でした。彼らは、古教会スラヴ語という言葉の文法を定め、聖書をこの言語に翻訳しました。ただし、この聖書の本文の大部分は失われ、現存していません。ただ、かつて完訳された『古教会スラヴ語聖書』の断片としては現在、種々の断片（『プラハ断片集』・『キエフ断片集』など）が残っています。八六三年、モラヴィアの公モイミールを洗礼し、その後（八七二年以降）、ボヘミアの公ボルジヴォイ一世⁽²⁴⁾公（聖ヴァーツラフの祖父）も大モラヴィアの公に説得され、聖御メトディオから洗礼を受けたと伝えられています。

現ウクライナの首都キエフでも、十世紀以降の「プラハ古文書断片集」のある一版と、十四世紀に再編された形で資料が残っています。

古教会スラヴ語による文化の「移動」とその新しい地域

旧ブルガリアのオフリド修道院（現在マケドニア共和国領内）には、修道院士聖クリメント（ギリシャ語では「温和な人」か）が記したと思われる古教会スラヴ語の書『聖コンスタンティノスの生涯』⁽²⁵⁾が保存されています。この書によると、聖クリメントの教師であった聖コンスタンティノス（ギリシャ語で「変わらぬ人」か）は、「人が、自分が分からない言語で祈ることに意味はない」と判断し、古教会スラヴ語と呼ばれる、スラヴ語派のある種の標準語文法を整え、この言語でキリスト教の布教を進めました。

『聖コンスタンティノスの生涯』⁽²⁵⁾によると、コンスタンティノスは当時次のように述べました。「神から降る雨の雫はすべての人の上と同じく当たるのではないのか。太陽はすべての人間を同じく照らしているのではないのか。また、すべての人間は同じく、空気を吸っているのではないのか。」

また、聖コンスタンティノスは、キリスト教説教の報酬として、金銭や物品は受けず、奴隷達の解放だけを求めたそうです。

聖書をスラヴの言語に翻訳することに大きな意義があるという主張の根拠として、著者は布教活動においては、執筆の時点で聖書の翻訳が多くあり、大変役に立っていると主張します。例としては、当時一般に布教に使われたヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語の聖書以外には、すでにアルメニア語、ペルシャ語、アバズグ語、イベリア語、ゴート語、アヴァル語、トウルスイ語、カザ（一）ル語、エジプト語（コプト語）、アラブ語、シリア語等々による聖書訳の存在を挙げています。この情報から、九世紀の段階では、現在主にイスラーム化されている中近東の地域でも、キリスト教が幅広く栄えていたことが推測されます。（ただし、これらの翻訳の多くについては、『聖コンスタンティノスの生涯』が現在唯一の情報源です。）

一方、八六六年、ローマ・カトリック教会の公会議が開かれました。フランク帝国の聖職者たちの依頼に基づいて、ローマ法王は教会スラヴ語による布教を即刻禁止し、その後、八七〇年代に、聖メトディオスは同じ聖職者達の依頼に基づいて三年間投獄されたと報告されています。

大モラヴィアのキリスト教化の百二十六年後、九八九年に、キエフ・ロシアの公・聖ヴラディミール（スラヴ語では「世を治めた人」か）も洗礼を受け、旧ブルガリアや旧マケドニアの地域で生存していた古教会スラヴ語の文化を承継することを選びました。ただ、この「キリスト教化」に至ったプロセスではまず多くの無実な人の命が奪われ、暴力でまずキリスト教防止、次にキリスト教推進が行われました。モラヴィアの平和的なキリスト教化とはあまりにも対照的な展開でした。

十世紀のボヘミアでは、「プルシェミスル王朝」現在、むしろ「モイミール王朝とみられます、モイミールとは、スラヴ語では「国をわが物にした人」のことを意味する」とみられます）がある部族の有力な「公朝」でした。公ボルジヴォイ一世（Bořivoj I.）は、敬虔なクリスチャンであった公的統治者聖ヴァーツラフ（Václav, Venceslaus）の祖父であり、モラヴィアで洗礼を受けました。受難者として祭られる聖ヴァーツラフについての『聖ヴァーツラフ伝』⁽²⁶⁾は恐らく十世紀、古教会スラヴとラテン語の双方によっても記されました。

西欧のキリスト教と東欧のキリスト教の完全な分裂

一〇五四年、キリストの神としての捉え方についての論争が西欧教会と教会の「大分裂」⁽²⁷⁾に展開し、コンスタンチノープルでギリシャ正統教会が自立し、ローマから完全に分離します。

それ以来、東ヨーロッパのキリスト教会は、ウクライナやラトヴィアのギリシャ・カトリック教会を除いて、ローマ教皇を認めていません。

ヨーロッパ東西分裂後のチェコ領

ボヘミア・プルシェミスル朝の公ブラチスラフ二世（Vratislav II、在位 1085-1092）はチェコ国家（ボヘミア王国）の初めての王（一世代の「名誉王」）になり、また並行して、ポーランド王の Wratislaw I. 世としても即位します。この初めてのボヘミア王は一〇七九年、プラハ城の礼拝堂でスラヴ語派の言語を使う許可を求めます。

しかし、教皇聖グレゴリウス七世は、「この願いを聞き入れることは断じてできません」とし、拒否しました。

聖グレゴリウス七世の教書⁽²⁸⁾によれば、「物事を深く熟慮する人々にとっては当然の判断であろうが、神は、聖書の内容を定められた地においては不明瞭にしておくことを望ましいとお考えになられた。もし聖書の内容はすべての者にとって完全に周知であり、明晰であれば俗化し、不敬に扱われるようになる、あるいは知識の限られた人々に誤って解釈され、彼らを過ちに誘導しかねない。」

そのため、十一世紀以降のローマ・カトリック教会の地域では、一般大衆は聖書を読むことを禁止され、聖書の学習と説教は聖職者達のみの特権となりました。教皇の勅書は、当時のラテン語を神聖な言語とみなし、違反者を死刑に処すという懲罰に言及しています。

聖プロコピウスの努力や賢明な遺言のおかげで、古教会スラヴ語はその後も中部ボヘミアのサーザヴァ（Sázava）修道院⁽²⁹⁾で一〇九六年まで用いられました。

聖書の訳文を焼却し、聖書を翻訳した者の火あぶりを求める動きと、古教会スラヴ語の禁止

一一九九年、教皇インノケンティウス三世は、聖書をフランス語に訳した人を「異端者」と指定し、この翻訳作業には次のように厳しく反発しました⁽³⁰⁾。

「無教養な平民は、差し出がましく聖書の崇高さにかかわったり、聖書の内容に基づいた説教を進めたりすることは望ましくない」と述べました。

根拠として挙げたのは、次のイエスの言葉でした。「神聖なものを犬に与えてはならない。また、真珠を豚に投げてはならない」(マタイ 7:6)。

教皇の教書が発行されると、信者が聖書を所有したり、読んだりするということをめぐって、キリスト教会では長期にわたって、複雑な争いが始まりました。

一般人が理解できる言語による聖書の翻訳を焼却し、未承認言語による聖書の所有者が火刑されることがありました。それでも、チェコでは、十二世紀か十三世紀から常に、聖書の翻訳が行われたことが明らかになり、十三世紀から世俗文学の翻訳も現れています。

一三四七年、チェコのプラハで皇帝カレル四世は、教会スラヴ語使用のエマウス修道院 (Emauzský klášter)⁽³¹⁾を創設したことによって、東西に分割されたキリスト教ヨーロッパの再統合への第一歩を踏み出しましたが、一六一一年、修道院はドイツ・パサウ市の軍に荒らされてから、紆余曲説を経てラテン語の典礼に戻りました。

ヤン・フスと「チェコ式」宗教改革

十五世紀になると、ボヘミアの改革者の、司祭ヤン・フスがカレル大学の学長になり、チェコ語による聖書の普及を支援し、プラハのベトレヘム礼拝堂で、聖書についての公開講座を開きました。

フスはカトリック司祭達の贅沢な暮らしや免罪符販売を批判し、同じ批判を進めたイギリスの改革者ジョン・ウィケリフ (J.Wycliffe) の著作品の普及を自由に許可することを求めました。フスは、後のルターと同様に、免罪符販売は個人達の贅沢達のために悪用されただけでなく、トルコ軍の脅威に対するキリスト教ヨーロッパの防衛のために使われうることを十分認識していませんでした。

残念ながら、ヤン・フス (J.Hus) は一四一五年のコンスタンツ公会議では、元のキリスト教の在り方とその理念の解釈についての自分の考えを自由に表すことは許されず、「異端者」として教会削除され、国家権力から処刑判決を受け、火あぶりされましたが、二〇〇〇年、教皇イオアンネ・パオロ二世の主導の下で、ヤン・フスの名誉回復が行われました⁽³²⁾。

中世にはもっとも厳しかったカトリック教会は現在、様々なキリスト教会のうち、大変寛容で本来のキリスト教のやさしさや人間愛に戻っていると考えられます。

その後、フスの教えの改革的性質を巡って、ボヘミアでは「フス派戦争」と呼ばれる内戦が勃発しました。

チェコにおけるカトリック派と改革派の共存

一四三六年、スイスのバーゼル公会議について協議し、カトリック派と改革派 (いわゆる「神体拝領両形色論派」"utraquists"⁽³³⁾) は、チェコ・モラヴィア・シレシアの領土におけるキリスト典礼の制度に関し、意に達しました。

チェコの地にかぎって、「神の教えを自由に唱える権利」はカトリック派と改革派両方によって保障されました。

十六世紀には、チェコのプロテスタント派はドイツの改革派の応援を得て、二種の優れたチェコ語全訳を刊行します。この二つの聖書は、「メラントリフ (Melantrich) 出版社の聖書」と、ヘブライ語やギリシャ語原典から直接に訳された先述の Bible Kralická (『クラリツェ町の聖書』) でした。

カトリックの世界では、プロテスタント派の推進とは対照的に、フランチェスコ・ザビエルの後継者アレサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valigniano) が一五八二年～一五九〇年間にヨーロッパに派遣した「天正遣欧使節団」の「日本列島報告書」はチェコのカトリック派からすぐ訳されました。⁽³⁴⁾

この報告書のチェコ語訳は同時に、プラハ市と、中ボヘミア県に位置するリトミシュル (Litomyšl)

市にあったチェコのカトリック出版社に印刷され、マルコ・ポーロの『見聞録』に次いで初めての日本についての詳細な情報でありました。

にもかかわらず、十一世紀初頭からやや長く、おそらく百年以上、ローマ・カトリック教会は、聖書のチェコ語訳を正式に承認していなかったようです。

また、十七世紀になると、ハプスブルク朝の新皇帝マティアス（一五五七～一六一九、在位一六一一年から）とその後継者フェルディナンド二世皇帝（一五七八～一六三三）はチェコの地で徹底した再カトリック化を目指し、まだ一六〇九年に承認されていたボヘミアにおける信仰の自由を制限し、無妥協的な再カトリック化を推進します。

反ハプスブルク蜂起粉碎後の抗宗教改革

改革思想の制限に対し、一六一八年、チェコ王国の身分代表の会は、プロテスタント貴族の指導の下で蜂起を起こし、皇帝の代表たちをプラハ城の窓から放出します。こうして、ヨーロッパのカトリックとプロテスタントとの間に残酷な三十年戦争（一六一八～一六四八）⁽³⁵⁾が勃発し、遂には、双方は信仰の問題も忘れ、多方面の破壊や暴力を起こしました。ボミアでは三分の一の住民は死に、大きな建物から孤独な柱や門の一部だけが残してしまいました。戦争の末期には、カトリックとプロテスタントの縄張り合いは、オーストリアとフランス・スウェーデンの対決に変わり、プロテスタントの支え合いは忘れられました。

一六二〇年、チェコ改革派蜂起派の軍がプラハ付近のビーラー・ホラ合戦でオーストリア皇帝のカトリック軍に敗れました。信仰の自由の時代は完全に切断され、オーストリアの皇帝は蜂起派の指導者を死刑し、力による再カトリック化を求めます。

また、チェコはオーストリア帝国の直接の支配下に置かれ、ドイツ語が第一公用語になりました。

対抗宗教改革にともなうチェコ語文化の退化

先述の一六二〇年のビーラー・ホラの戦い後、チェコ語は「異端の言語」と見なされるようになりました。改革派の貴族や知識人は国外に追放され、平民は強制的な再カトリック化やドイツ語化を迎え、プラハをはじめとして、カトリックとプロテスタントの間に全ヨーロッパを引き込むかの三十年戦争が勃発しました。

チェコ語で書かれた文学作品は様々な制約を受け、チェコの標準語はほとんど死語になり、都市文化は大幅にドイツ語化されました。

「チェコ」の地で進められた十七世紀・十八世紀の抗宗教改革の中では、あらゆる改革派の著書は没収されていただけでなく、たまに焼却も行われましたが、弾圧の範囲はまだ明らかに証明されるのではなく、論争が続いています⁽³⁶⁾。

ただ、チェコ語はこの時代に文章語として弱化し、地方の話し言葉になりさがったことは否定できません。

チェコ語・チェコ語文化の再生の芽生え

一七八〇年のマリア・テレジア女帝の没後、ヨーゼフ二世の勅令で濃奴制が廃止され、義務教育や信仰に対する寛容が進められ、住民の異動は自由になりました。その結果、地方の若いチェコ人も都会で勉強することができるようになったのです。新しい知識人は、チェコ民族の文化や言語の復興を起こした結果、一七八〇年から一八四八年までの期間、チェコ語やチェコ民族の文化は完全に再生されまし

た。⁽³⁷⁾

十八世紀中期になると、カトリック世界でも重大な動きが始まり、マリア・テレジア女帝のイニチアチヴで、『クラリツェ聖書』に基づいて、カトリック版の聖書（『一般の人々のための聖書』）も刊行されました。

その基盤になった『クラリツェ聖書』は現在ローマ・カトリック教会からも高く評価され、その内容の多くは、クリスチャン共通のチェコ語訳聖書のベースにもなりました。

復興運動の芽生えはすでにそれ以前、一七五〇年前後、オーストリア帝国の政府は帝国の諸民族への関心を高めた時代がありました。

ところが、復興の実際のスタートは S. Vydra, V. Vokoun, J. Dobner などのチェコ語史研究・チェコ民族史研究の発展にありました。

この運動はさらに、各民族の文化の重要性を主張したドイツ人牧師ヘルダー (J. G. von Herder 1744-1803) の民族論の立場からも積極的な刺激を受けました。

西洋においてヘルダーが民族の概念を詳細に分析したことは、本居宣長 (1730-1801) が日本で「古道」を推進していたことと極めて類似しています。

チェコ民族が復興する過程では、翻訳作業が一流の手立てになりました。

チェコ文化復興の達成

十九世紀の初めになると、現在本居宣長に喩えられている言語学者ヨーゼフ・ユンクマン (Josef Jungmann 1773-1847) がチェコ語大辞典を作り、幾多の世界文学の傑作をチェコ語訳しています。

ユンクマンは、チェコ語が公用語であるドイツ語に劣らないことを示すために、世界文学の傑作のチェコ語訳に取り組みました。

まず、チェコ語とチェコ民族の存在の意義を翻訳作業によって裏付けることが必要でした。

明治期の日本人にとっても、新しい日本語の形成や高度の翻訳技術による西洋文化の紹介は極めて大きな意味を持ちました。

一八四八年、オーストリア帝国で自由・民権・立憲の運動が盛り上がりました。一時成果を収めると、民主化はさらに進みます。

その後、この運動はオーストリア軍に弾圧され、チェコ民族の政治的な要求は拒否されました。ただし、自主権の強化を求める動きが失敗しても、チェコ文学の自立とチェコ語教育の分野では、チェコ語とチェコ文化の復興の目的が達成されました。

一八五三年ごろ、女性作家ボジェナ・ニェムツォヴァーが小説『おばあさん』の中で、チェコの風土や自然に思いを馳せ、作曲家ベドルジハ・スメタナがチェコ語のオペラを起こしながら、交響曲『わが祖国』などを作曲し、また世紀末にはアントニン・ドヴォルザークが作曲『ユモレスカ』・『アメリカ』・『スラヴ舞曲』・オペラ『ルサルカ (水の精)』などを作曲します。ドヴォルザークはまた『万葉集』の選歌もチェコ語訳し、合唱のために改定しました。

当時、チェコ語の復興は奇跡のように受け止められ、他の民族の国家の再構にも影響を及ぼしていました。

第二次大戦後、チェコ語の復興がモデルになり、新ヘブライ語の推進や昔のアイルランド語の復興のための励しにもなりました。

欧州の二十世紀は民族主義の時代でしたが、それがグローバル化に入れ替わったといわれています。

いわゆる「小民族の民族主義」はグローバル化のためにも有意義です。小民族民諸主義の狙いは覇権、

排他性あるいは植民地支配ではありません。小民族の存在によって世界の多様性やダイナミズムを保証することです。

II. 『古事記』と『万葉集』のチェコ語訳

ア・『古事記』

一 『古事記』と『コスマス年代記』の対比⁽³⁸⁾

チェコ史と関連する最古の文献は、十一世紀成立の『コスマス年代記』です。この年代記の著者コスマスはプラハ大聖堂の参事会員でした。

『コスマス年代記』は、修道院士コスマスが著したラテン語の故事集です。ラテン語で書かれていますが、その文章は少なくとも部分的に、スラヴ語派の言語から翻訳されてできたことが明らかです。⁽³⁸⁾

当時のチェコの本は十一世紀以降、ローマ教皇庁の影響、また十四世紀の初め以降、百年以上の独自のチェコ文学の発展の結果、ラテン文字のチェコ語で書かれています。十二世紀から十四世紀まで、非公式の聖書のチェコ語訳が進みます。

十一世紀のチェコ語の記録が残っていますが、現存の世俗的なチェコ文学作品も十三世紀初期に書かれました。一四〇〇年ごろ、韻を踏む叙事詩の形をしたチェコ語による『ダリミル年代記』が執筆されました。

しかし、ラテン語による『コスマス年代記』(Chronica Boemorum, 成立は1119-1125年間?)は、十二世紀のローマ・カトリック聖堂の参事会員が記したものです。そのせいか、スラヴ語派の言語による文章の本文は残っていません。

この年代記には、ボヘミア公国を統治した歴代侯の順列として挙げられることが記されます。

南モラヴィアのZnojmo(ズノイモ)市にある十二世紀のロトンダの壁画では、『コスマス年代記』に基づく歴代諸侯の肖像が描かれています。

しかし最近、研究者V.Karbusickýの著書⁽³⁹⁾によると、この配列を表すとみられる表現の言葉は歴代諸公の配列ではなく、一人の具体的な公が自らの意志を表し、口頭伝承の形で記憶されたメッセージであるという説があります。(音楽史の著名な専門家Karbusickýは、これらの伝説のある形式が、プロフェッショナルによる、朝廷の歌・朗読の伝承で形成されたとみています。)このメッセージは外国人使節の指導者に宛てられ、口頭で伝えるべき朗読のための語句であると述べられています。「足を止めよ、ドイツ人!よく考えろ。我らは戦いも、加害も意図しているのではない。我らは十字架の礼拝はしないが、客として来られた者を丁寧に迎えている。」

つまり、『コスマス年代記』は、キリスト教化以前の、スラヴ語「通訳」のために作られたメッセージを保存したにすぎない、という可能性があります。

また、Bible Kralickáがボヘミアの故事集についてはさらに詳しいですが、この伝記の原文が十二世紀、十四世紀、あるいは十四世紀から十七世紀までの期間に成立したかはまだ不明であります。また、十世紀に初めての、ラテン文字によるチェコ語のセンテンスも記されました。

一方、『古事記』では、神々の誕生や結婚の神話、国生みの神話、日神と月神の神話、女神の死と黄泉国の神話、男神と女神間の誓約(神生みによる霊力の駆け引き)の神話などは、所定の記憶法の形跡を持った「語り」で表されるために、長期の豊かな口頭伝承の名残であると考えられます。

課題としての『古事記』の翻訳

『古事記』チェコ語訳の初版は二〇一二年二月、日本の国際交流基金、チェコのカレル大学(EUの研

究支援企画の枠内)と福井県立大学の支援を戴き、『古事記』の成立記念を機に出版されました。(Praha: Ex Oriente 出版) 支援については、感謝の意を表します。

初版は三六〇であり、傍注の数は一、一一七、それ以外には伝統的な歴代天皇の配列、索引、後書き、文献リストなどが含まれています。

初版と第二版の表紙には、堂本印象作の日本画『木之華開耶媛』(一九二九年作、京都府立堂本印象美術館蔵)が掲載されております。また、イラストとしては、翻訳者は名古屋所蔵の真福寺本の一部分(名古屋国立美術館所蔵)を利用する許可をいただきましたので、心からお礼を申し上げます。

二〇一三年十二月、プラハで全校訂第二版が出版されました。第二版は現在売り切れていますが、さらに再販を検討しております。

この『古事記』のチェコ語訳は教材としても用いられております。

前書き・翻訳の入門などについて

「翻訳者の前書き」では『古事記』成立の記念に触れ、二〇一一年の東日本大震災後の時期における励ましの意義について触れます。

次に翻訳の入門では、原始日本の歴史と原始日本語の研究について詳細に説明し、『古事記』の内容、成立、異本や研究史について細かく説明します。

翻訳の進め方

『古事記』チェコ語訳の準備を考えたとき、研究者の立場と読者の立場を双方とも配慮しなければならないと判断いたしておりました。そのため、『古事記』の内容を全七部に分け、各部の個性を尊重して翻訳を進めました。

文学作品の重訳を避けた理由

日本文学作品の美しい重訳(ドイツ語、英語やロシア語を基にしたもの)の内にも、魅力的で著名な重訳もあります。しかし、ここで重訳に潜む危険性に注目し、重訳をできるだけ避けようと思う理由を説明したいと思います。

『古事記』が直接に日本語からチェコ語に翻訳されたことは今までありませんでした。

重訳では一般によく見られる傾向は、待遇表現や諱の翻訳や解釈は適切でない、語順に関しては正確で自然な対応は達成されないという傾向があり、また、重訳の場合、助詞「ガ」と「ハ」の対立を正しく表していなかったりします。また、訳文における文の切り方や複雑な構文的成分の把握に矛盾や欠点が見られることなどです。

しかし、このコメントによっては決して、具体的な訳文を批判するのではなく、あくまで自分の選択の背景を説明しているだけです。たとえば、日本語とチェコ語では、成分は短いほど動詞に近い位置に配置され、またハを付けた成分は特定の位置に配置されることがあります。このことは素晴らしい重訳の中でも難しいです。

重訳では、第三言語の影響があり、自然な語順が得られない例は多く観察されます。また、固有名詞、複合語や掛け詞、言葉遊びなども重訳で失われます。

翻訳文における各部の扱い方について

(チェコ語訳を例に)

第1部「神代」の初期（天地開闢からスサノヲの出雲追放まで）

『古事記』本文の冒頭部分は、作品が天地開闢から始まっている点では、『日本書紀』の冒頭部分とほぼ一致します。

記紀では、天地開闢の把え方は主に漢籍の古典を基にしていますが、『古事記』では、日本固有の神話の世界を『日本書紀』より遥かに具体的に描かれる。

『日本書紀』の叙述をみると、天と地とは、陽と陰とのような関係にあり、不釣り合いもなく分かれたという印象を受けます。一方、『古事記』と『日本書紀』の一書では、高天原の詳しい言及が見られ、「日本固有の天」のイメージがあります。また、『日本書紀』の一書の文章は、作品の完成後に新しく書き込まれたと思われます。

『古事記』では、初期六代の神は明瞭な対をなさず、また明白に男性・女性に分かれていない。最初期の神はむしろ、生命のない混沌から植物のように育った。この意味では、『古事記』における生命の把握は大胆な創造の構想ではなく、極めて自然に展開するゆえに一種の「進化論」を思わせます。

『古事記』チェコ語訳の紹介 - 文章の部

小 小学館（古典文学全集）：Ch Chamberlain, Fi Fiala, He Heldt, Ph Philippi（補 A.）また、甲乙類の母音について多くの問題が残っていますので、ここで乙類の仮想的な表音文字として、Philippi の表記システムにあると類似のラテン文字の書記素 (e), (i), (o) を用います。

小一七（頁）・一（行）

夫れ、混元 1) すでに凝りて、気（き乙ざし）2)・象（かたち）未（いま）だ効（あらは）れず。名も無く、為（わざ）も無ければ誰か其の形を知らむ。然（しか）れども、乾坤（あめ乙つち）初めて分かれて、参（= 三）はしらの神、造化（ごうげ）の首と作（な）れり。陰陽 3,4) 斯（しか）に開けて、二はしらの靈群れ（たまむれ）の品（しな）の祖（おや）と為（な）れり。

（所以 ゆゑに、幽・顕に出で入りして、日・月目を洗ふに影あらはれたり。）

Fi 29 4

Když směsice pralátky 1)（混沌、原始的混合体）ztuhla, síla（力）2) a tvar（形）se v ní ještě neprojevíly（現れなかった）。Byla bezejmenná（名なし）a nečinná（動きなし），kdo by dokázal vyjádřit, čemu se podobá. Když se však nebe a země oddělily, stála u prvopočátku veškerého tvoření（万物生成の始まり）tři božstva.（三はしらの神）

Tedy povstali Paní tmy 3)（陰の主人 / 女性）a Pán světla 4)（陽の主人 / 男性），jejichž duchové（それらの靈は）se stali prarodiči jediného veškerenstva（万物の親となった）。

（数字は原文との対応を示します。）

コメント：大陸の思想は直接に参照せず、「気」を「力」と訳します。

Ph 37:2 When the primeval matter had congealed but breath and form had not yet appeared, there were no names and no actions. Who can know its form ?

However, when heaven and earth were first divided, the three deities became the first of all creation.

Ch 4 :1 Now when chaos had begun to condense, but force and form were not yet manifest, and there was nought named, nought done, who could know its shape ? Nevertheless, Heaven and Earth first parted, and the Three Deities performed the commencement of creation; the Passive and Active Essences then developed, and the Two Spirits became the Ancestors of all things...

He 1:l. 3 When the primordial ether had already condensed, neither signs nor shapes had yet appeared.

Without either words or deeds, who can know how it was formed ?

But after heaven and earth separated, three spirits were the first to be created. ...

小一七・七 故（かれ）、太素5）は香冥（くら）けれども、本つ教6）に因りて土7）を孕み、島8）を産みし時を識れり。

Fi 30 8 Počátek všech věcí je nejasný 5）（不明、明るくない、曖昧）, ale z prastarých učení 6）（太古の教え） víme o věku, kdy byla počata 7） země a zrozeny 8） ostrovy.

コメント：「元つ教」も日本独自の伝承のようで、大陸の考え方を直接に受けてうろもの

Ph 37:2. Thus, though the primeval beginnings be distant and dim, yet by the ancient teachings do we know the time when the lands were conceived and the islands born.

Ch 5 1

So in the dimness of the great commencement, we, by relying on the original teaching, learn the time of the conception of the earth and of the birth of islands;...

He 1 14 Thus, though the world' s origins are dark and dim, ancient teachings inform us of a time when lands were conceived and islands born.

小一八・一 熊と化れるもの爪を出だして、天の剣高倉に獲たまひき。尾生ひたる人径を遮へて・・・

小二二・一 時に舎人有り。姓は稗田、名は阿礼、齡は是式拾八、為人（ひととなり）聡（とく）明（さと）くして、目を渡れば口にヨミ、耳に触るれば、心に勒す。即ち阿礼に勅語して、をヨミ習はしめたまひき。

Fi 35（頁）16（行） Byl tehdy přítomen jistý dvorní sekretář. Jeho příjmení（姓） bylo Pieda（稗田） a jméno（名） Are（阿礼）, bylo mu 28 let. Bylo mu dáno（という能力が生まれつきに与えられた）, že（生まれつきの性質としては） vše, co jeho oči jednou zahlédly napsané, dokázala jeho ústa recitovat（一度だけ目で見たものは朗読できた）, vše, co třeba jen jedenkrát zaslechly jeho uši（耳で一度でも聞いたことは）, uvízlo mu v mysli a již to nepustil z paměti（すでに心に染み込み、記憶から離れなくなっている）。

Proto Jeho Veličenstvo (陛下、つまり天武天皇) nařídilo Aremu< (この) 阿礼 > {そのため、陛下は阿礼に次のように命じた), aby se naučil recitovat (誦習すること、朗読/訓み を覚えること) díla *Genealogická linie císařských božstev jako potomků Slunce a Staré příběhy vlády minulých císařů*< 『帝皇の日継ぎ』と『先代・近代の旧辞集』 >.

コメント：阿礼は、一度読んだものを朗読することを覚え、また聞いた口頭伝承もよく記憶することができた。恐らく断片的な記録に基づいた口頭の語りをすることができました。口頭伝承を書き留めたヴァージョンがすでに多かったことは『日本書紀』などからも読み取れます。

Ph 41:43. At that time there was a court attendant whose surname was PIYEDA and his given name ARE. He was twenty-eight years old. He proposed such great native intelligence that he could repeat orally whatever met his eye, and whatever struck his ears was indelibly impressed in his heart.

Then an imperial command was given to ARE to learn the Sumera mikoto: no: pitugi and the Saki no: jo: no: purugo:to.

Ch11 8

At that time there was a retainer whose surname was Hiyeda and his personal name Are. He was twenty-eight years old, and of so intelligent a disposition that he could repeat with his mouth what ever met his eyes, and record with his heart whatever struck his ears.

Fortwith Are was commanded to learn by heart the genealogies of the emperors, and likewise the words of former ages.

He 3:l.26

At that time there was a royal attendant whose clan name was Feed-Millet Paddies and whose personal name was Ours (I), aged twenty-eight years and bright by nature.

Whatever crossed those eyes would be recited in that mouth.

Whatever brushed those ears would be engraved in that mind.

Straightaway His Majesty (陛下) commanded this Ours (筆者、臣) to learn the recitation of the sovereign' s sun line of succession and the ancient words of former ages.

小二四・三 然れども、上古の時は、言と意と並に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於いては即ち難し。已に訓に因りて述べたるは、詞心に及ばず。全く音（こゑ）を以（もち）て連ねたるは、事の趣更に長し。

Fi 37 7

Za raných dnů říše byla ovšem (しかし) slova (言葉) prostá 16) (素朴、単純) a stejně tak i jejich smysl (その言葉の意). Bylo tedy obtížné rozložit obsah spisu do jednotlivých znaků(内容を分けて個々の文字に割り当て) a sestavit z nich věty(文を組むのが難しかった).

Proto pokud by obsah textu (文章の内容) měl být vyjádřen pouze smyslem pojmových znaků (漢字の意味に収まらない), nezapsali bychom nikdy vše, co chceme říci (表意の記号だけでは容易に

はできず、表現は、表したい志には及ばない) .Na druhé straně, pokud se rozhodneme vyjádřit celé znění textu vhodnými znaky (言葉の音を全てそのまま適切な記号で伝えたいときは) , bude spis velice dlouhý (文章は大変長くなり) a jeho smysl těžko uchopitelný (意味は捉えがたく／纏めがたい) .

コメント: 著者は既存の文字についての知識を纏め、『古事記』に一番相応しいと思っている表記を探っています。

以下の翻訳に関しては、He が Ch を強く受け継いでいることがはっきりしています。

Ph 43:57

However, during the times of antiquity, both words and meanings were unsophisticated, and it was difficult to reduce the sentences and phrases to writing.

If expressed completely in ideographic writing, the words will not correspond exactly with the meaning, and if written entirely phonetically, the account will be much longer.

Ch 13 8

But in high antiquity speech and thought were so simple, that it would be difficult to arrange phrases and compose periods in the characters. To relate everything in ideographic description would entail an inadequate expression of the meaning; to write altogether according to the phonetic method would make the story of events unduly lengthy.

He 4:126

But in high antiquity, both words and their meanings were simple, making it difficult to write them out in sentences and form them into phrases.

If the accounts were to use characters only for their meaning, then the words would not correspond exactly with what was intended.

But if the record were to rely on characters only for their sound, then it would grow long and hard to get through.

Thus at times a single sentence may combine characters used for their spoken sound with those used for their written sense, while at other times a single affair is recorded using only the latter.

When the logic of a sentence is hard to make out, it is clarified with a note, but when the intended import is easy to grasp, no note is given.

語訳の例：

以下で、『古事記』に掲載される神の名の例を若干挙げます。

天之御中主神あめのみなかぬしのかみ

Fi : Božstvo uctívaného středu Nebes Ame no minaka nuši no kami

Ph: Heavenly Center Lord Deity

Ch: Master-of-the-August-Centre of Heaven-

He: Master Mighty Center of Heaven…

高御産巢日神

Fi:Vysoké božstvo obdařené plodivou silou

Taka mi musu pi no kami:

Ph:High Generative Force Deity, High-August-Producing-Wondrous-Deity

Ch:Divine Generative Force Deity, Divine-Producing-Wondrous-Deity

He: Lofty Growth Spirit…

天之常立神 ← 国之…

Fi : Božstvo uctívaného středu Nebes

(天の真っただ中に立たれる神様)

Ame no minaka nuši no kami n

KUNI (NO:) TOKO TATI NO: KAMI:

Božstvo stojící uprostřed země

(地の真っ唯中に立たれる神様)

Deity-Standing-Eternally-On-Earth

He: the spirit Ever-standing Land

神産巢日神 Kami: mu su pi no kami:

Fi:Božstvo schopné rodit bohy

(神を生む力のいらっしやる神様)

He:the Spirit Abundant Clouds Moor

宇比地二之神

U pidi ni no: kami:

(命を与える土・泥の神様)

Fi: Božstvo životodárného bahna

He: Floating Mud (浮く泥)

妹砂 (須) 比智二 (玉) 之神

Su pidi ni no: kami:

Fi: (Starší) Božstvo půdy z písku a životodárného bahna

<カッコにある語句は準備中の最新版のみ>

He: Silted Mud (より細かい泥)

大戸之泥 (ヂ) 之神

Opo to no: di no: kami:

(Mladší) Božstvo ducha Veliké brány

(砂・土の兄の弟の霊の神様)

<カッコにある語句は準備中の最新版のみ>

He: the spirit Great Entry Mistress…

オモダルの神

Omo: daru no: kami

Božstvo dokonalého vzhledu

(欠陥のない容姿の神様)

宇磨志阿斯卡備比古遲神

Umasi asi kabi piko no kami:

Fi: Zdařilý mladičkový rákosový výhonek

< 優れた幼き葦の芽 (の神様) >

He: the Spirit Fine Budding Reed Lad

KUNI (NO:) TOKO TATI NO: KAMI:

Fi:Božstvo stojící uprostřed země

(地の真ただ中に立っておられる神様)

Deity-Standing-Eternally-On-Earth:

He: the spirit Ever-standing Land

Izanaki

Fi:Izanaki

He 8: He Who Beckoned (誘う男性)

Izanami

Fi:Izanami

He 8: She Who Beckoned (誘う女性)

コメント：以上の部分で、できるだけ直訳に近づこうとしています。

小 31 8 故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼鉾を指し下ろして画きしかば、塩こをろこをろ画き鳴して、引き上げし時に、其の鉾の末より垂り落ちし塩は、累り積もりて島と成りき。是、才能碁呂島ぞ。

Fi 44: Obě božstva stanula na nebeském plovoucím mostě, sklopila ono skvostné kopí, ponořila je do proudících vod a zaviřila jím. A hle, když kopí pozvedla, sůl, která z jeho hrotu skanula, ztuhla v ostrov. A byl to ostrov, který je zván Ono:go:ro:.

Phi : " self-curdling island"

He: This is Self-Shaped Isle.

コメント：「オノゴロシマ」の様々な解釈を傍注で挙げます。

Ph 49:3. Thereupon, the two Deities stood on The Heavenly Floating Bridge, and Lowering the Heavenly Jeweled Spear, they entrusted the mission to them.

He 8:l.21. And so proclaiming, they gave them a jeweled halberd of heaven to aid them in this undertaking.

So the two spirits stood on the floating bridge of heaven, and when they lowered the jeweled spear to stir the sea below, its brine sloshed and swished about as they churned it. When they pulled it up, clumps of salt dripped down from its tip to pile up into an island. . . .

Fi(傍注に基づく解説): Ostrůvek vzniklý tuhnutím mísené směsi (混合物が固まってできた島)

小三三・二 伊邪那美命の答へて曰しく、「然(しか)、善し。」といひき。爾くして、伊邪那岐命のたまひしく「然らば、吾と汝と、この天の御柱を行き廻り逢ひて、みとのマグワヒを為む」とのりたましき。如此期りて、乃ちのりたまひしく、「汝は、右より巡り逢へ。我は左より巡り逢はむ」とのりたまひき。約り終りて廻りし時に、伊邪那美命の先づ言はく、「あなにやし、えをとこを」といひ、後に伊邪那岐命の言ひしく「あなにやし、えをとめを」といひき。

Fi 45 Dobrá, odpověděla mu. Obejděme tedy tento sloup a sejděme se v ložní síni.

Poté Izanaki řekl: “Ty obcházej po pravé straně, až dojdeš ke mně, a já budu obcházet po levé, až dojdu k tobě.”

Když se sešli, pravila Izanami! “Jak krásný jinoch !”

I pravil Izanaki: “Jak spanilá dívka !”

コメント：形としては、「イザナキ」と「イザナミ」の名はこのままにして、翻訳と男女の順の問題を傍注でのみ説明します。

Ph 50: 7.

Then Izanagi no: miko:to: said: “Then let us you and me, walk in a circle around this heavenly pillar and meet and have conjugal intercourse”

After thus agreeing, (Izanagi no: miko:to:) then said: “You walk around from the right, and I will walk around from the left and meet you.”

...

He 9:l.3.

The mighty one She Who Beckoned replied, saying:

“That sounds good.”

And so the mighty one He Who Beckoned proclaimed:

“Well then, let us walk around the mighty pillar of heaven and then join in bed.”

So they pledged thus and then circled around it.

"Thye mighty one She Who Beckoned spoke first, saying:

" What a fine boy !"

The mighty one He Who Beckoned spoke after her, saying:

"What a fine girl !"

小三三・一一・然れども、くみどに興して生みし子は、水蛭子。

Fi 46 4 Přesto se spojili a na místě svého svazku pak zplodili dítě. Byla to však Pijavice (PIRU KO 蛭子).

コメント:「ヒル」の可能な意味(日の女神)、つまり、神話発展のある段階においては、日神の「日」という解釈の可能性)を傍注で挙げる。

Ph 51:11. Nevertheless, they commenced procreation and gave birth to a leech-child.

Ch 23 19 Nihilominus in thalamo …inceperunt, et filium (nomine) Hirudinem (vel hirudini similem) pepererunt. (ラテン語:それにもかかわらず、(伊邪那岐と伊邪那美は)(これを)続け、ヒルコという名を持った(、あるいは蛭に似ていた)息子を設けた。)

He 9:l.28 Nonetheless, they consummated their marriage and made a limbless Leech Child, placed it in a reed boat, and set it out to sea.

Next they made Frost Isle. This too they did not count among their children.

黄泉国:伊邪那岐が勝手に建物に入ったとき

小 45 15 (伊邪那岐命) 一つ火を燭して、入り見し時に、うじたかれころろきて、頭には大雷が居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には折(さく)雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏す雷居り、併せて八くさの雷の神、成り居りき。

Fi 55 14 …A hle: V útrokách paní Izanami se s hlasitým čvachtáním rozlézali červi.

Na hlavě jí pobýval Veliký hrom, na prsou Ohnivý hrom, v břišním otvoru Černý Hrom, v ochmýření rodidel Třešticí hrom, na levé ruce Mladistvý hrom, na pravé Pozemský hrom, na levé noze Hřímající hrom a na pravé bůh uložený ke spánku….

コメント:「いかづち」を「雷」として捉えるのが普通ですが、「いかなる霊」という解釈も可能です。(傍注のみにしています。)

He 15: l.6 So he broke off one large end tooth from the comb he was wearing in his left looped lock of mighty hair, turned it into a torch, and peered inside to see squirming maggots slithering in and out of her body.

In her head was Grown Thunder.

In her breasts was Blazing Thunder.
In her stomach was Darkening Thunder.
In her privates was Splitting Thunder.
In her left hand was Young Thunder.
In her right hand was Earthen Thunder.
In her left foot was Booming Thunder.
In her right foot was Bowing Thunder.
Eight thunder spirits all told.

Ph 62:6.

At this time, magots were squirming and roaring (in the corpse of Izanami no: miko:to:).
In her head was Great Thunder,
In her breast was Fire Thunder,
In her belly was Black Thunder,
In her genitals was Crack Thunder,
In her left hand was Young Thunder,
In her right hand was Earth Thunder,
In her left foot was Sounding Thunder,
In her right foot was Reclining Thunder.
Altogether there were Eight Thunder Deities.

小五七・六 爾くして、伊邪那岐命、桃子に告らさく、「汝、吾を助けしが如く、芦原中国に所有る、うつしき青人草の、苦しき瀬に落ちて患へ惚む時に、助くべし」と、告らし、名を賜ひて意富加牟豆美命と号けき。

Fi 56 17 Pak Izanaki řekl duchům oněch broskví: Ochraňujte tuto Střední říši rákosových planin i se všemi smrtelníky, kteří vzešli jako zelená tráva z tohoto prázdného (ウツの) (=nevydařeného 失敗の多い、不完全な) Pozemského světa (地上界、人間界)..

コメント：世界の物語のパターンとの対比を試みています。

Ph 65:9. Then Izanagi no: miko:to: said to the peaches: " Just as you have saved me, when, in the Central Land of the Reed Plains, any of the race of mortal men fall into painful straits and suffer in anguish, then do you save them also.

He 16, l.5: And so the mighty one He Who Beckoned proclaimed to the peaches:

"As you have aided me, so may you also aid any green-grass mortal from the central realm of reed plains who encounters pain and suffering."

And so proclaiming, he bestowed on them the title of mighty one Great Sacred Majesty.

語訳の例：

Fi 57 4 Balvan odvráčení (TI GAPESI NO: OPO KAMI: 地返し神)

ti piki no : ipa tipiki no: isi

Obrovský balvan, s nímž pohne jen tisíc mužů… (千人の男しか動かさない大石)

He 16, l.12: And so he took a giant boulder that it would take a thousand men to pull…

Jo:mo: tu saka 黄泉坂 (黄泉=闇の国、見てはいけない国、見えない夜の国、寝る時の夢の国)の坂

Jobi saka 呼び坂

He 16:l.13 the Gentle Decline passing to land of the Underworld (= 地下の国に向かう時に渡る緩やかな坂) …

小・五八・一

天照大御神ののりたまひしく、「然らば、汝が心の清く明きは、何にしてか知らむ」とのりたまひき。…故(かれ)爾(しか)くして、各天(おのおのあめ)の安(やす)の河を中に置きて、うけふ時に、天照大御神、先づ建早須佐之男命の佩ける十拳の剣を乞ひ渡して、三段に打ち折りて、ヌナトモモユラ(鈴音、玉音)に「天の真名井に振りスすぎて、さがみにかみて、吹き捨つる気吹の狭霧に成れる神の御名は、多紀理毘売命。亦に名は、奥津島比売命と謂ふ。次に、市寸島比売命。亦の御名は、狭依毘売命という。次に、多岐都比売命。<三柱>

コメント：「安」と「八州」、「真名」と「真」を打ち明かす泉の神話的関連性を傍注で説明します。

小 六三・一五 爾くして、高天原皆暗く、葦原中国悉く闇し。…是に、万の神の声は、狭蠅なす満ち、万の妖は、悉く発りき。是を以て、八百万の神、天の安の河原に神集ひ集ひて、高御産巢日神の子、思ひ兼ね神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集め、鳴かしめて、天の安の河上の堅石を取り、天の金山の鉄を取りて、鍛人の天津麻羅を求めて、伊斯許理度売命に科(お)はせ、鏡を作らしめ、…

天兒屋命・布刀玉命を召して、天の香山の真男鹿の肩を内(うつ)抜きに抜きて、天の香山のははかを取りて、占合ひまかなはしめて、天の香山の五百津真賢木を、根こじにこじて、上つ枝に八尺の鏡を取り繫け、下つ枝に白丹寸手・青丹寸手を取り乗(し)でて、此の種々の物は、布刀玉命、ふと御幣(みてぐら)と取り持ちて、天兒屋命、ふとノリ戸言寿き曰天手力男神、戸の腋に隠り立ち、天宇受女命、手草に天の香山の小竹での葉を結ひて、天の岩屋の戸にうけを伏せて、踏みとどろこし、神係り為て、胸乳を掛き出して、裳の緒をほとに忍し垂れき。爾かくして、高天原動(とよ)みて、八百万の神共に咲ひき。

Fi 69 6 …Nebeská pláň tonula v naprosté tmě…

Fi69 10 Konečně se osm myriád bohů sešlo v nesčetných proudech k božskému sněmu v řečišti Nebeské řeky míru a přimělo syna Vysokého božstva obdařeného plodivou silou (TAKA MI MUSU PI NO: KAMI), onoho bezmezně hloubavého Rozvažujícího boha (OMO: PI KANE NO: KAMI), který prohlédne budoucnost, k zamyšlení, co si počít.

Pak sem ze světa věčnosti dali snést tetřevy, v jejichž zpěvu zní věčný nářek, a přiměli je, aby

kokrhali...

Nato povolali Nebeského boha malé chatrče (AME: NO: KO JA NO: MIKO:TO:) sa Tlustého vznešeného boha perel, duchů a obřadů (PUTO TAMA NO: MIKO:TO:), aby vytrhli klíčnou kost z těla jeleního samce na Nebeské hoře a aby z této hory přinesli dřevo z kmene vzácné sakury kani pa, kost rozpálili v ohni a použili ji ve věštírně sa nipa k věštění, vytrhali i s kořeny na pětset rozkvetlých stromů *ma saka ki*; rostoucím na Nebeské hoře, k jejich horním větvkám upevnili dlouhé šňůrky koráleků *maga tama*, do

Středních větví umístili ono obrovité osmistopé zrcadlo a na nižší větve zavěsili oděv duchů, bílé a modré proužky sukna niki te.

コメント：この神話の呪いや占いの方式は弥生時代以前に遡っている説があります。

Ph 81:2, Because of this, constant night reigned, and the cries of the myriad deities were everywhere abundant, like summer flies...

Ph 82:4.

Then the eight hundred myriad deities assembled in a divine assembly in the river bed of the AME: NO: YASU KAPA.

They caused the child of TAKA MI MUSUBINO: KAMI: to ponder.

They gathered together the long-crying birds of TO:KO:YO: and caused them to cry.

They took the heavenly hard rock from the upper stream of the river AME: NO: YASU KAPA; they took iron from [the mountain] AME: NO: KANAYAMA...

...

They uprooted by the very roots the flourishing MA-SAKAKI trees of the mountain AME: NO: KAGU-YAMA; to the upper branches they affixed long strings of myriad MAGA-TAMA beads; in the middle branches they hung a large-dimensioned mirror; in the lower branches they suspended white NIKITE cloth and blue NIKITE cloth.

He23: And so the high plains of heaven were cast into utter darkness and the central realm of reed plains was filled with gloom. Because of this, endless night came to cover the world.

-

Now the buzzing cries of spirits grew thick as summer flies, and all manner of calamities arose everywhere.

And thus the many spirits in their multitudes gathered together in a sacred gathering to take counsel on the riverbed of Heaven's Tranquil Stream.

They had the spirit Thought Over, child of the spirit Lofty Growth, figure out what to do.

They gathered cockerels, long-crying birds of Everworld, and set them to crowing.

They took a hard stone of heaven from the upper reaches of ...

They uprooted by its roots a many-branched hallowed evergreen that flourished on Mount Gleaming in heaven.

From its upper branches they hung long strands strung with many corve pendants.
From its middle branches they hung a massive mirror.
From its lower branches they hung prayer strips made of white mulberry paper and
blue hemp.

第2部. 神の代 (第二期)

(スサノヲはヤマタノオロチと戦う)

小七一・一三

爾くして、早須佐之男命、其の御佩かしせる十券の剣を抜き、其の蛇を切り散らしかば、緋河、血に変はりて流れき。

故(かれ)、其の中の尾を切りし時に、御佩(みは)かしの刀、毀(こほ)れき。爾くして、怪しと思ひ、御刀(みはかし)の前を以て 刺し割りて見れば、都牟刃(つむじ)の大刀在り。故、此の大刀を取り、怪しき物と思ひて、天照大御神に曰して上げき。是は、草那芸之大刀ぞ。

Fi 76 2 ...Když (Susa no: wo) sekal jeden z prostředních ocasů, čepel se mu zlomila...

Ocas sám se opět proměnil ve velký ostrý meč, zvaný Sekáč trávy...

He26: And so the mighty one Rushing Raging Man unsheathed the sword ten hand spans long that was girded by his mighty side and hacked the dragon to pieces until the

Spirit River ran red with its blood. When he sliced off a middle tail, the blade of his mighty sword snapped off.

And so, thinking it strange, he cut the tail open with the tip of the stub of his mighty blade and looked inside to find a keen-edged broadsword there. ...

This is the broadsword Grass Scyther... .

出雲八重垣・・・

小 七三・八

八雲立つ

出雲八重垣

妻籠みに

八重垣作る

その八重垣を

77 1 Osmero hradeb

má můj palác v Idumu,

pod osmerem mraků.

Osmero hradeb postavím,

můj dvorec s osmerem hradeb.

コメント：この和歌の中の繰り返しは確かに、この和歌がかなり古いことを示しています。イ

ザナミ・イザナキの誘いの順についての神話や、「誓約」についての神話を受けて、男性と女性の、宗教・政治における役割についての争いが、ここまでの神話群の興味深い中心的な問題点です。スサノヲが遠く離れた媛を救うのではなく、媛を簪に変えて、その力を借りることも関心を惹きます。

Ph 91:6 The many-fenced palace of IDUMO
Of the many clouds rising-
To dwell there with my spouse
Do I build a many-fenced palace:
Ah, that many-fenced palace !

He 27
And so he made a mighty song. That song said:
„Eightfold are the clouds that rise
In Billowing Clouds, where eightfold fences
To surround and shelter my wife
Are eight-fold fences made by me.

Ah, those eight-fold fences ! “

第3部「神代」(第三期)(天神降臨から神武天皇まで・・・)

第3部では、神話の語りは「神々しい」文体に戻ります。

ここで周縁的な勢力が国家統一のために果たす重役が語られる。その結果、かつてのスサノヲや大国主の剣を受けた大和武の説話が中心になる。

この部分では、国譲りの語りの関係で次の長い神名も出現します。

語訳の例：

「アメニギシクニニギシアマツヒコヒコホノニギノミコト」

コメント：この神名の長さは音声の比喩的な「量的側面」を記号化して、瓊瓊杵尊の「言霊」の重さを表し、また、タブー化される名の正確な発声を阻止します。

さらに、

コノハナノサクヤビメ、

ヒコホデミノミコト、

トヨタマヒメ、

ウガヤフキカエズノミコト

などがあります。

小・七三・一六・兄八島土努美神、大山津見神の女、名は木花知流比売を娶りて、生みし子は、布流

母遅久努須努神。

Nejstarší syn JA-SIMA-ZI-NUMI-NO-KAMI: si vzal za ženu Princeznu padajících sakurových květů KO:NO-PANA-PIRU-PIME... .

Ph 92:15. The eldest son YA-SIMA-ZINUMI-NO: KAMI: took as wife KO:NO-PANA-TIRU- PIME.

He 27:

His eldest child, the spirit Might Master ruling Eightfold Isles, took to wife a daughter Of Great Mounting Majesty who was named Lady Tree Blossoms Scattering.

小・七五・六

故、此の大国主神の兄弟は、八十神座しき。然れども、皆、国をば大国主神に避りき。避りし所以は、其の八十神、名稲羽の八上比売に婚（あ）はむと欲ふ心有りて、共に稲羽に行きし時に、大穴牟遲神に袋を負せて、従者（ともびと）と為て、率て往きき。是に、気多前に至りし時に、・・・

Fi 79 Veliký bůh pozemské říše měl na osmdesát bratří, a přece všichni...svěřili nakonec svou zemi do jeho rukou.

Stalo se to takto. Všichni tito nespočetní bohové si přáli oženit se s bohyní JA GAMI:

PIME z Inaby. Vypravili se do těch končin a Duch velké nezlomné síly (OPO NAMU DI NO: KAMI) nesl jejich zavazadla jako jejich služebník.

Když dorazili na mys KE:TA,...

コメント：オホナムヂノカミ（語源は完全に明瞭であるとはいえません）を「大きな力の霊の神」として部分的に訳しました（語源は完全に明瞭であるとはいえません）が、ヤガミヒメは訳していません。ヤガミヒメはヤソガミとの縁結びを拒否し、オホナムヂノカミを選びました。結局、彼女の名の意義は明瞭でも、重要でもありません。

Ph 93:1. The OPO-KUNI-NUSI-NO-KAMI: had eighty brothers; but these eighty deities all ceded their lands to OPO-KUNI-NUSI-NO-KAMI:. The reason for their doing so was...

He 28:

Although the spirit Great Land Master had eighty brothers, they all gave their lands over to him...

小・八五・一七・

八千矛の

神の命は

八島国

妻娶（ま）きかねて（枕く「枕にする」の意）

遠々し

高志の国に

...

Fi 87:12

Veliký bůh (偉大なる神),
Pán nesčetných kopí (八千矛の神)
Pátral na Osmero ostrovech (「八の島」で)
po dobré ženě (良い妻を探しました) ...

Ch 104 1 YA-TI-POKO:NO-KAMI: ("Many-Thousand-Spears-Deity ") went to woo NUNAKAPA-PIME of the land of KOSI.

Ph104:3.

The god YA-TI-POKO,
Unable to find a wife
In the land of the eight islands,

He 32-33:

Eight Thousand Spears,
this spirit and mighty one,
in all the land of eightfold isles
cannot find a wife..

八七・二

我が立たせれば
青山に
ぬえは鳴きぬ・・・

Fi 88 7 Zatím jen stojím...

Fi 88 11 A jak tak stojím
Na zelených horách,
zpívá pekelný pták...

Ph 105:21. I stood there...

...Then, on the verdant mountains,
The NUYE bird sang...

He 33:

...I came to the maiden

asleep in a room whose wooden door
I pushed and rattled
I pulled and shook
while standing there.

On green mountains
tiger thrushes have trilled:...

小・八七・三
心痛くも
鳴くなる鳥か
此の鳥も
打ち止めこそぬ
いしたふや
天馳使
事の
語りごと
此（こ）をば

Fi 89 1 Proč jen ten pták
tak časně odporně křičí ?
Jděte milá, chyťte ho a třeba ho zabte !

Tak znějí má slova.
Kéž budou doručena
ptáky coby Nebeskými posly,
oněmi zpěváčky
na způsob prastarých písní,
tak přesně sdělena,
jak budou vyřčena.

Ph 105:33. Ah how hateful
These birds for crying !
Would that I could make them
Stop their accursed singing !

These are
The words,
The words handed down
By the isitapu ya

AMA mesenger clan.

...

Ch 93 5...7 “Now it (my heart) will now be a betterel (小林千鳥、「騙されやすい人」)! . . . Oh !
swiftly-flying heaven-racing messenger ! the tradition of the thing, too, this ! “

He 33-34:

How it hurts the heart
To hear those birds cry !
Those very same birds
may someone strike silent,
those heaven-racing envoys
who follow from behind !

Of this same affair
Is a tale told in words
Such as these.

小 八七・二 . . . 青山に
日が隠らば
射干玉の
夜はい出なむ (夜はきっと来るだろう)
朝日の
笑み栄え来て

Fi 90 13 Za zelenými vrchy
zapadá slunce.
Zavládne temná noc,
(夜の暗闇は世を支配するでしょうが、)
Než ranní slunce
zavoní radostným smíchem
a opět zazáří.
(やがて朝日が 暖かい微笑みをし、
再び輝くでしょう)

Ph 106:19. As soon as the sun
Hides behind the verdant mountains,
Then jet-black
Night will come.
Smiling radiantly
Like the morning sun,

He34:

On green mountains
when the sun hides
as beads of jet
black the night that arrives,
followed by the morning sun
smiling radiantly, then come.

小・九一・八・白き腕（ただむき）

そ叩き

叩き愛（まな）がり

真玉手

玉手刺し枕き

股長に

寝は寝さむを

Fi 90 19 A zatím vaše ruce

(あなたの優しい手は)

budou laskat má prsa

(私の胸を撫でるでしょう)

bílá jak sníh,

(沫雪のような白いものを)

jako morušové pátěří..

(たくずのように柔らかいものを)

Ph112:28. With your arms

White as a rope of TAKU fibers,

You will embrace

My breast, alive with youth,

Soft as the light snow...

He37:

As powdered snow

soft with youth are these breasts

As corded mulberry bark,

Gleaming white are

Fi 91 3 Usněme si v náruči,

nohy natažené

kamsi přes okraj lože...

Ph 112:30. We shall embrace and entwine our bodies;
Your jewel-like hands
Will entwine with mine,
And your legs outstretched...

He38:
Come stretch out your legs
And slip deep into sleep....
...
This is called a spirit tale.

(中巻)

第4部 歴代天皇の世界 1.

このあたりの文章は人間味を強め、伝説を語るフルゴト（序で言及される「旧辞」、恐らく一定の故事談集のようなもの）に基づいています。このチェコの故事談集を意識し、またこの内容に相応しい語彙や文体を選択しました。

天神降臨について

小・九九・四 天照大御神の命以て「豊葦原千秋長五百水穂国は、我が御子、正勝吾勝々早日天忍穂耳命の知らさむ国ぞ」と、言因したまひて、天降しき。

Fi 102 3

Bohyně AMA TERASU vydala příkaz: “Zemi hojných rákosových planin, tisíců (žňových)podzimů a stovek čerstvých podzimních klasů v rozpuku bude spravovat můj vznešený syn Vítěz vítězů.

語訳のコメント：「豊葦原千秋長五百水穂国」を “Země hojných rákosových planin, tisíců (žňových) podzimů a stovek čerstvých podzimních (rýžových) klasů v rozpuku”、「豊かな芦原の、数千の(収穫の)秋の、そして数百の瑞々しき(米の)穂の芽の国」「正勝吾勝々(早日天忍穂耳命)を “Vznešený (a pohotový) mocný bůh (sluncem rozzářeného) Vítěz vítězů (高貴で素早く、空に日のように輝く)力に富む、自称の)勝利者の勝利者 (=勝利者よ、我勝利者よ)” とします。Heのように、“ears “などのような言葉遊びはなく、元の意味はやはり「身々」であるとみています。主語「我」を複統合類の言語のように直接に文中に挿入することもチェコ語に難しく、単純化しながらパラフレーズし、傍注で詳細に説明しています。(Heも「ほほの=穂々の」を “the mighty (one)” と訳しています。)

Ph 120:1.

AMA-TERASU-OPO-MI-KAMI commanded; TO:YO:-ASI-PARA-NO:-AKI-NO:-MIDU-PO-NO:-KUNI is the land to be ruled by my child MASA-KATU-A-KATU-KATI-PAYA-PI-AME:-NO:-OSO-PO-MIMI-NO:-MIKO:TO:;.”

He 40: Now, as the spirit Great Land Master, he lamented, declaring:

“How am I to fashion this land by myself ? What spirit can I join with to that we can fashion this land together ?”

He 41: The great and mighty spirit Heaven Shining issued a mighty command, saying :

“The realm of plentiful reed plains, of a thousand five hundred long autumns of fresh rice ears, will be a realm ruled by our heir, the mighty one Truly Winning Have I Won with Rushing Might Ruling Grand Rice Ears of Heaven.”

Fi 107 25 SUSA NO: WO odpověděl: Poslechněte si, co vám odpoví můj syn Vznešený vládce veškerých slov (JA PE KO:TO: SIRO: NUSI ~).

Nato bylo Nebeské ptačí božstvo na lodi (船に乗った天の鳥 の / という 神 AME: NO: TO:RI PUNE NO: KAMI), vysláno, aby přivolalo Vznešeného vládce veškerých slov, a ten odpověděl: “Věnujme tuto zemi v nejhlubší úctě potomkům nebeských bohů.”

コメント:言霊 (=事の命?) の重要性を意識し、「事代主神」を Vznešený vládce veškerých slov (すべての言葉の〔意味/内容 = 「アイデア」〕の〔尊敬する支配者、スラヴ多神教時代の神、「神主」、占い師〕) と訳しました。

Ph 130:10. Then he (SUSA-NO:-WO) replied:

“I cannot say My son YA-PE-KO:TO:-SIRO:-NUSI-NO:-KAMI: will say.

However, he has gone to amuse himself (hunting for) birds and fishing at the cape of MIPO, and has not yet returned.”

Hereupon AME:-NO:-TO:RI-PUNE-NO:-KAMI: was dispatched to summon YA-PE-KO:TO:-SIRO:NO:KAMI:, who, when inquiry was made of him, spoke to his father the great deity, saying:

“With fearful reverence let us present this land to the offspring of the heavenly deities.”

He 46:

And so Great Land Master replied, saying:

“It is not for me to say, milords. My son the spirit Master Speaker for Many Others will be the one to say. But he went out to fish and hunt birds at Mighty Pluming Cape and has not yet returned.”

And so it was that the spirit-question Bird Boat of Heaven was sent to summon Master Speaker for Many Others.

When he was asked the same question, he turned to the great spirit who was his father and urged him, saying:

“These words fill me with awe. Let us offer up our lands to this mighty child of heaven’s spirits.”

小・一一一・一六・櫛八玉神、鵜と化り、海の底に入り、底の埴をクひい出し、・・・ヒキリ臼を作り、海薄(コモ)の殻を以て、ひきりキヌを作りて、火を切りい出して曰く：

「是の、我がキれる火は、高間原には、神産巢日御祖命の、辿る天の新巢の煤の、八券垂ひろ」まで焼(た)き挙げ、地(つち)の下は、底津石(いは)根に焼(た)き凝らして、千尋縄打ち筵(は)へ、釣り為る海人が、(口大の尾翼鱸(をはたすずき)、さわさわに引き寄せアげて、打竹のとををとををに、天の真魚グひ(まなぐひ)を奉る。)」

Fi 110 15 Bůh s osmi životy jako zuby hřebenu se nyní proměnil v kormorána (補 B.) a ponořil až na same dno moře, načež se odtud vrátil s jílovou hlinkou z mořského dna az nati řas ko:mo:, ... zhotovil hmoždír s otvorem ve stěně, v němž točil hůlkou na křesání ohně, pak tento oheň zažehl a zazpíval:

Kéž plamen,
který jsem právě rozžal
šlehá až k nebi
do nového sídla
Božstva schopného rodit
bohy na Nebeské pláni,
až z něho splynou saze
o délce osmi sáhů.
Kéž hlínu pod palácem
vypálí jako podzemní skálu,
a provaz z jemných vláken, dlouhý tisíc stop,
vlekou jak rybáři síť.

コメント：チェコ語の語彙を慎重に選び、ほとんど完全な直訳となっています。

Ph 136:17. The fishermen fishing spread out the TAKU ropes,
The thousand-fathom ropes…

語訳：

Fi121

ホデリのみこと

Bůh vzrůstající se plamenů(ますます強まる炎の神)

Fi122

ホヲリのみこと

Bůh ohýbající dohořívající plameny(弱まる炎を曲げる神)

He 53

・・・HODERI the mighty one Bold Flame

HOHO-DEMI the mighty one Flickering Flame

第4部・歴代天皇の世界1.

皇統中の争いの沙汰や、大和武による国家統一の物語は面白く、一定の「人間味」を匂わせます。

語訳

Fi133

かむ倭いわれびこ (の命) (後の神武天皇)

Božský jinoch z Iware v Jamatu

神なる、ヤマトノイワレの青年

Fi135

サヲネツヒコ

Jinoch odpočívající na bidle
竿に寝る / 横になっている青年

(下巻)

第5部 歴代天皇の世界2.

小 一五九・九

あめ鶴鶴 (つつ=せきれい、まなばしら、和名抄：アマドリ)
千鳥・真シトト (ましとど シトド、オオジロの類か)
などサケル利目 (とめ) (なぜ御目を黒く染めている)

Fi 146 18

Proč na mne kulíte

ty oči malované

jako kulík, tetřev, ledňáček ?

「なんである、真っ黒の入れ墨で染めた (ような) 眼 (まなこ) で俺ずっと見ておるのか。あの鶴鶴のような、アマドリのような、あのオオジロのような目で・・・」

コメント：黒い入れ墨は犯罪の記しでもあったとみられますが、ここではこの引用は比喩的な用法で、広く開いたような、大きくて美しい目のことでしょう。傍注でもこれを暗示しております。

一五九・一一

愛女 (をとめ) に

直 (ただ) に 逢はむと (すぐ会いたいから)

わがさける利目 (とめ) (目を広く開けて見つめているよ)

Ch: (詳しい翻訳はなし。)

He70 :

・・・

Fi 147 2

Hledám tvůj pohled,

(おれは大変な目にあつた。)

Ty oči milované,

(お前の、あの可愛いマナコを見て酔つた。)

Zkrátka, musím je mít.

(そういえば、すぐ会いたいのだ。)

He:

…So that maidens may
meet me face to face,
hence these sharp slit eyes.

小 二二七・一二
景行天王の御代とヤマト・タケルについて
弟橘比売命の御歌
さねさし
相模（さがむ）の小野に
燃ゆる火の
火中に立ちて
問ひし君はも

Fi 190 18 Na pláni Sagamu
(サガムの小野で)
pod ostrohem Sane
(サネと呼ばれるこの所で)
uprostřed plamenů
žhnoucích a sálajících
(熱く燃える
炎に囲まれて)
bál jste se o mne, Pane.
(旦那は私のことを心配なさいました) …

コメント：問題は「さねさし」という枕詞の翻訳で、傍注では詳細に説明しています。

Ph 241:7. Oh you, my lord, alas-
You who once, standing among the flames
Of the burning fire, spoke my name
On the mountain-surrounded
Plain of SAGAMU !

小・二三三・一五
ヤマト・タケルの御歌
倭は
国の真秀ろば
たたなづく
青垣
山籠れる
倭し麗はし

Fi 197 15

Jamato:—Záhoří,

(ヤマト—「山の奥」は)

je požehnaný kraj

mé země

(わが国の祝福された地である。…)

Krajina

táhnoucí se do dáli

za ploty zelených stromů

uprostřed hor…

Jak překrásné je Jamato: !

コメント:「やまと」を Záhoří (山の後、山の奥) と訳し、「まほろば」を”požehnaný kraj” (祝福された地) と訳しました。

Ph 248:1.

YAMATO: is

The highest part of the land;

The mountains are green partitions

Lying layer upon layer,

Nestled among the mountains,

How beautiful is YAMATO !

He 106

Yamato it is that

surpasses all lands.

Like piled mats

In the green fence

Of mountains encircling

Yamato the splendid !

小二三五 二

愛しけやし

我家 (わがへ) の方よ

雲居立ち来 (く) も

Fi 196 13

Ach bože,

Vrátím se někdy ?

Oblaka letí mi vstříc !
Kde je můj dům ?
(ああ
いつ帰れるでしょうか。
蜘蛛は我を迎えに飛ぶのです。
どこにありますか、俺の家。)

コメント:Ach bože は現代チェコ語でただ「ああ愛しい、ああ寂しい、ああね」というような意味で、語源的な分析は不要です。

249 18
From the direction
Of my beloved home
The clouds are rising.

He 107:
How lovely it is,
my home from which
clouds come rising !

歴代天皇の世界3.
(応神天皇から推古天皇まで)

西暦五八〇年代以前とそれ以降の変革の間には、大きな切れ目がある。『古事記』はこれ以降歴代天皇についての略歴データだけ挙げています。つまり、『古事記』と『日本書紀』は天皇についてそれぞれ異なる情報を提供しています。この転換点以降は、序が言及する『帝紀』のような史料に頼ったようです。ここでは代々の天皇の統治についてのデータが一致します。この文章部分の文学的価値は低いですが、史的な価値は高いと思われます。

第6部

歴代天皇の世界3.

西暦五八〇年代以前とそれ以降の変革の間には、大きな切れ目
あります。『古事記』は歴代天皇についての略歴データだけ挙げています。つまり、『古事記』と『日本書紀』は天皇についてそれぞれ異なる情報を提供しています。この転換点以降は、序が言及する『帝紀』のような史料に頼ったようです。ここでは代々の天皇の統治についてのデータは一致します。
この文章部分の文学的価値は低いですが、史的な価値は高いと思われます。

二六二 四二

この蟹や 何処 (いづこ) の蟹
百伝不 (ももづたふ) 角鹿 (つぬが) の蟹

横去らふ 伊知遅島 美島に着き
みほの鳥の 潜き息づき

しらたゆふ ささなみ道を すくすくと
我がいませばや 木幡の道に
偶はしし嬢子・・・

我が見し子に
運た蓋（うたはだ）に
向かひ居（を）るかも
い添日居るかも

Fi 218-220
Tento krab,
odkud asi je ?
Je to krab
z daleké Tunugy.
Pořád leze na stranu（ずと横向けに這っています。）.
Kam asi míří ?（どこに向かっているでしょう。）

Již dorazil na Itisimu,
Již dorazil na Misimu,
Zadýchaně spěchá dál
Za zvlněné jezero
（篠波の湖を超えて、
溜息をしながら
這っているのです。）.

Jako ptáci mipo,
ony potápky,
co pláčí, nařikají.
Když jsme tam dospěli
po cestě s terasovými políčky,
potkali jsme děvče
mířící do Kōpady.
（そこに付いたら、
我ら<=朕>は、
木幡に向かう娘に出会った。）
...
To je to děvče, které,jaká radost,které

sedí teď naproti mně,

sedí teď vedle mne.

コメント：この歌では「蟹の角家からの旅」が語られますが、語りは徐々に、応神天皇が儒便の近江国の旅と嫁との出会いの話に移り変わります。チェコ語では、君主が自分のことを語るとき、述語は一人称複数になります。一人称に切り替わる場所を選ぶ点では、He の転換点の選択は Fi と全く同じです。ただ、He は普通の一人称単数を使っています。

He 120:

This little crab,

Where is he from, this crab ?

Over a hundred leagues way
from Horns came this crab.

Scuttling sideways,

Where is he off to ?

To Oak Way Isle

And Three Isles he went.

Like the little grebe,

Bobbing, gulps in gasps,

I stumbled to shimmering

Wavelets on whose road,

Speeding swiftly long,

I made my way to

Tree Banner, on whose road

I met this maiden…

第7部 ヤスマロが書いたと記される序（「上巻併びに序」）

上記の本文の引用では、「序」の補文を第1部の枠の中で、第1部と一緒に扱いました。

しかし、この「序」は明らかに本文の他のすべての文章より後で成立し、それとは異なるほぼ通常の正当漢で執筆されました。明らかに、文従来の本文の後で書かれ、本文に含まれていなかった七世紀の歴史の内容もある程度補っているとみます。

「序」の中の字「誦」（「よ・む」）の捉え方から、『古事記』の中に、神道の古道を中心に展開した、様々な口頭伝承から選択した記録が含まれていると考えられます。上代にはこれは「常識」であったようで、現在もこの前提は確実に、明瞭に否定することはできません。そのため、「序」前部の内容を「第七部」と致します。

漢文化を重視する『日本書紀』は、太野や大伴という氏名を使った氏族の歴史的な役割については語っていません。また『続日本紀』の中の家持の把握にも、『万葉集』とは異なる温度差があり、敬意を伴わないような語り方も注目されます。

まとめ

以上のように、『古事記』を七部に分け、それぞれの部分に最適と判断される翻訳法のストラテジーの選択を試みました。

2. 『万葉集』のチェコ語訳 (A.V.Líman) について

Ho Honda, *The Manyoshu: A New and Complete Translation*. The Hokuseido Press, 1967.,

L A.V.Líman *Manjōshū. Deset tisíc listů ze starého Japonska*. Praha;Brody 2002-2008.

A.V. リーマン (Líman) 氏の翻訳は、チェコ・プラハの出版社 Brody で 2001 年から 2008 年までの期間に、全四巻 (一巻の平均の頁数は約 330 です) に分けて発行されました。

「序」のモットーでは、翻訳者のリーマン氏はアメリカ先住民 (「西海岸のインディアン」) の言葉 (「人間が生涯に通る道のうち一番長いのが、頭から心への道だ」) を引用しています。

リーマン氏の解説によると、古代人の知恵が情緒的に深く、古代人は自然との調和において生きていました。一方、現代人は現象の細かい分析や科学的応用の力が高いですが、現実を専門分野に分割するので、本来の生き物の感性、各々の人生体験のユニーク性と統一性を見失っています。

和歌の翻訳は自由詩の形をとっており、詳細な注釈が施されています。

1. (「大泊瀬稚武 (= 雄略) 天皇」)

Děvče s košíčkem,

籠を持つ女の子よ！

hezkým košíčkem,

可愛い籠を持つ女の子よ！

děvče s lopatkou,

ふくしを持つ女の子よ！

pěknou lopatkou,

綺麗なふくしを持つ女の子よ！

co sbíráš byliny

tady na stráni,

この岡で

葉を摘まれる女の子よ！

kdepak je tvůj domov ?

家を教えてごらん。

Povíš mi své jméno ?

名前を教えてごらん。

Země Jamato, v níž se zalíbilo bohům,

神々御加護のヤマトの国はことごとく、

je celá mou říší,

私が君臨する国だ！

v níž jsem svrchovaný pán.

私がすべてを統治する国だ。

A já ti povím své jméno,

すると、この私が自分の名（＝名義）を教えて、

ukážu ti svůj dům.

自分の家に導いて入れる。

A basket in hand, a good basket,

and a trowel in hand, a little trowel,

O, Maiden, you pick herbs upon this hill.

Tell me your house,

and your name.

Over this land, Yamato, I reign;

Over this land I rule.

Call me your Lord,

Know you not my house and name ?

2. (舒明天皇)

Báseň císařova, když stoupal na horu Kagu, aby obhlédl svou zem:

(天皇の御制歌、香久山にお上りになり、国見をなさっておられた時)

3.4. (狩りをなさる天皇については、中皇命の命令で間人老が詠んだ歌)

Nejedno pohoří má Jamato,

ヤマトには群山が少なからずあれど、

já ale stoupám na horu Kagu

我はカグの山に、

zahalenou listovím

その、(天の国の)木の葉に(慎ましく)包まれた山に・・・、

a z jejího vrcholku

そしてその峰から

obhlížím svůj kraj.

我が国の国見をする。

Nad zemskou plání

国原のうえに

kouř z domácích krbů

stoupá a stoupá,

家々の竈の

煙が立ち、立ち、

nad mořskou šíravou

広々の海の原のうえに、

vznášejí se rackové

カモメたちが飛び立ち、

výš a výš.

さらに、さらに高く・・・

Jak nádherná země

ああ、美しい国だ、
je ten náš ostrov vážek,
トンボたちの（守る）我々の島は、
naše Jamato.
われわれのヤマト。

Ho:
Among hills soaring in Yamato
there Mt. Kagu perfect stands,
from where we see our fertile fields,
with wreaths of smoke from houses rising,
and plovers o'er the vast lake flying
How fair a country is Yamato !

Náš pán, který vládne
nejedné končině země,
(直訳) 隅々の地を
統治なさるわが大君、
hned zrána chopil se luku,
朝に早速弓を取り、
pevného luku z katalpy
しっかりした梓の弓を、
a pohladil jeho dřevo…
その木を撫でられ、…
slyším, jak jeho tětiva drnčí
v zlatých zářezích.
…金の長い弓はずで
糸が鳴るのが聞こえる。

Ho:
I hear the sound
of the Emperor's catalpa bow
which he ever takes when
to the morning and evening hunt
he deigns to go…

Průvodní báseň
反歌
Seřadil koně
na širé pláni Uči
a teď jistě kráčí
po ranních polích

zarostlých travou,
ach, tak hustou travou…
(直訳) 宇智の広い野原で
馬をお並べになり、
今はきつと、草が深く茂る
朝の野原を
お踏みになっていらっしゃる、
ああ、かの深草の野原を。
Ho: The emperor goes hunting
and horses tread the meadow.

8. 額田王

Nuže, k veslům…
U loďky v zálivu Nikita
(直訳) 熟田津で舟を用意し、
čekáme na měsíc…
月を待っている・・・。
Přiliv nám přeje,
潮も (満ちて) 適っている、
nuže, k veslům, k veslům…
さあ、オールを取れ、オールを取れ・・・
Ho:
At Nigitatsu
waiting for flood tide are we.
Now the moon appearing,
we can put out to sea.

9. 額田王

Zdálky se dívám
na ztichlé vlnky v zátocě…
Pod posvátným dubem
tam stojí (/stál ?) můj muž.
見ると、
波が静まった。
(かの) 神聖な檜の下に
わが君が立たれている (／立たれた?) のではないか。
Ho: Across the beautiful Yoshino mountains
I go to the Sacred Oak
under which my gentle lover stands.
(Tsuzuku Shougo)

様々な解釈案
仙覚
夕月の
仰ぎし
吾が背子が
い立たせるかね
いつかあはなむ

Omodaka Hisakata

静まりし
浦波さわく
吾背子がいたたせりけむ
五櫓が本

(上の句は土橋利彦による) ^{xlii}

(額田王が天皇とともに旅をするため、中大兄(天知天皇)あるいは大海人皇子(後の天武天皇)と不和があったので、殺された有馬皇子と同情していたようです。額田王が天知天皇の妻だけではなく、ある時点で天武天皇の妻になったという伝えは確認できませんが、『倭媛命世紀』を見ると、「五櫓が本」の神社はが数回移動しましたので、作者は、歌で触れる「五櫓が本」の位置を故意に紛らわせているのではないかと思います。

(フィアラ)

10,11,12 (中皇命)

Trvání tvého života
あなたの寿命も
i mého
俺の寿命も
určuje tráva, jež roste
na vrchu Iwaširo
岩代の岡で生える草(の力)でら
測ってみる!

10.

Ho: I wish that we could know
how long our life would be,
Here let us tie the grass roots,
praying for longevity.

13. Hora Kagu milovala

mužnost vrchu Unebi
a hora Miminasi
bez sebe žárlivostí
jí dala co proto.

A tak jako v dávných dobách bohů
o druha musí bojovat
každý smrtelník.
香久山は
畝傍山の雄々しさに憧れ、
耳無山はそれを妬み、共に争った。
神代にもそおようなことがあったから、
今もこの世の人間も
相手の妻を奪い合って、争っているのだ。
Ho: Yearning to marry fair Unebi Hill,
Kagu with Miminashi fell in strife.
Thus even in the age of Gods, alas,
these mountains had to fight to get a wife;
shall mortals then avoid it in our life ?

16. 額田王（御勅令による藤原鎌足のお尋ねに対し）
Moje jsou podzimní stráně...
何といっても秋山がよいと私は思う（「私のものだ！」）
Though winter passes in the springtime,...
it is the autumn which delights our hearts:
the golden maple leaves are fair to see.

17., 18., 19. 額田王
17. (近江への都遷しのときの歌)
Stokrát jsem se po cestě ohlédla
na horu Miwa, jejíž jméno zní
lahodným sake...
美味酒の名に響く三輪の山が遠ざかると
幾度も幾度も振り返った…

až horu zakryly ukrutné mraky
Musí to být ?
やがて恐ろしい雲が山を隠した。
避けられなかったのか。
Ho: Longing for the view of Miwa,
I looked back at each turning of the highway,
but of the peaks of Nara
concealed it with the clouds together...

...
19. (天皇が蒲生野で狩りをなさった時)
Tak jako se divoké osiky
na kraji lesů v Hesogatě

zatřpytí na tvém šatě,
tvůj obraz zazářil mi v oku,
pane můj.
ヘソガタの
森林の端の
榛の木が
わが君の衣装によくつくように
よく目につく
わが君のお姿・・・
Ho: The hagi flowers attract my eyes,
So does my husband dear.

29 柿本朝臣人麻呂（近江宮の跡に立ち寄った時）

・・・大和を置きて

楽浪の

大津の宮に・・・

天皇の

大宮は

ここと言へども

・・・

春草の滋く生ひたる

霞立ち

春日の霧れる

・・・

大宮所

見れば悲しも・・・

柿本人麻呂

...Proč musel Syn nebes

přenést svou vládu

do barbarských končin

země Ómi,

kde se nebe stýká se zemí

a kde vody útočí

na kámen paláce v Ócu,

městě hravých vln...

(小波の泊・・・)

Li の解説 47 頁) :

Hitomaro, sám prostého původu, přiznává božství i obyčejným horalům a rybářům v Jošinu

人麻呂は、「徒の人」(つまり、「百姓」出身) で海士(漁師)、吉野の山人などにも神性が認められるとみた。

「なぜ帝は、近江の国の細波の大津の都に移り、

ここから天下をお治めになったのか。
春の日がかすんできたせいなのか、
夏の草がしげってきたせいなのか、
この宮の跡を見る都度に悲しくなるのだ。

Ho...I hear this is the site,
but I see only vernal grasses,
and the old Court stands
deserted in the mist.

32 (高市古人)

Jsem snad jeden
z těch dávných dvořanů,
že je mi tak smutno,
když se dívám na trosky
jejich starého sídla
na pobřeží hravých vln ?
古の殿上人でも、
私があるというのか。

古い宮を
見ると悲しい。

(薩摩守の歌の本歌)

Alas, I, like an aged man,
stand and behold in sorrow here
the capital destroyed, deserted,
lying in ruins drear...

56 (或る本の歌、春日蔵人老)

"Hluboko, hluboko do očí
vrostly mi kamélie,
jež kvetou u hluboké řeky
na jarní louce v Kose."

直訳：わが瞳の 深い深い奥の底に 椿は沈み生え続けているのだ。深河の辺の 巨勢の春野で 花
の咲いたもの・・・

訓読：河の辺のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は。

120 (弓削皇子 ゆげのみこ)

"Než bych usychal steskem po milé,
to raději rozkvetu
na podzim jak květy hagi –
a vzápětí opadám.

直訳：愛する（女の）子に 恋焦がれつつ 枯れるよりも 秋の萩の花のように咲いて、散ってしまえばよい。

訓読] 我妹子に恋ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花にあらましを

420 (丹生王 にゆうのおおきみ、石田王 いわたのおおきみ が亡くなった時)

Báseň princezny Nipu

(丹生王の御歌)

Proč jen jsem nevezala hůl..

a nechránila ho večerním kouzlem...

proč jsem mu nehádala z věštebních oblázků ?

Proč jem jsem nezdobila

oltář ve svém domě...

proč jsem nestavěla obětní nádoby plné sake

vedle polštáře, ...

(直訳) 天と地の 寄り合う果てまで、

杖を突いてでも、突かなくても

何としても行って、

夕占でもして、石占でもして、

邸内に 祭壇を設け、

枕元に 斎薨を据え、

竹玉をいっぱい乗らし、・・・

ささらの小野の

七符の菅を

手に取りもって

Ho:

The handsome prince is dead,

and buried on...

432 (赤人)

MAMA NO TEGONA

(間の手児名)

Slyšel jsem,

...

že tady někde je náhrobek dívky

ze vsi Mama v kraji Kacušika...

俺も聞いた、

葛飾の真間の手児名が

安らかに眠っている場所のこと。

早く皆に知らせよう。

...

Ho: Lo, I beheld the tomb I tell you of,
the grassy tomb of the maiden, Tekona
of Mama in the shire of Katsushika !

893 (山上憶良)

Jamano(u)e no Okura

Vím dobře,

že svět je krutý a hanebný,

ale jak z něho utéct,

když nemám ptačí křídla ?

(直訳) 世の中を

憂しとやさしと

思へども

飛び立ち兼ねつ

鳥にしあらねば

Ho:

I wish for wings to let me flee

this narrow world so drear !

894

Báseň na cestu velvyslanci do Číny

(直訳) 唐に向かう大使に奉げる歌

好去好来の歌一首 反歌二首

神代より

言ひ伝て来らく

そらみつ

大和の国は

皇神 (すねかみ) の

厳しき国

言霊の

幸はふ国と

語り継ぎ

言ひ継がひけり

今の世の

人もことごと

目の前に

見たり知りたり。

人さには

満ちてはあれども

高光る太陽の大神の朝庭、

神 (かむ) ながら

愛での盛りに
天の下
奏したまひし
家の子と
選（えら）ひたまひて
勅旨（おほみこと）戴き
持ちて
唐の
遠き境に
遣はされ
まかりいませ・・・

Od času bohů,
(直訳) 神の代より、
z pokolení na pokolení
代々に
předáváme si víru,
次の信仰を伝え続ける。
že říše Jamato je zemí
倭の国は
božských vládců,
代々の皇命の国であり、
šťastným místem
pod ochranou duše slov.
言霊（言葉の魂）に加護された
祝福に満ちた国なのである。
Jak to víme ? Z úst současníků
なぜならば、これは現在の人々も語り。
i ze starých zkazek,
古のお話にもあり、
každý to na vlastní oči vidí.
皆の目に明らかに見えるのだ。
The country of Yamato is loved by the gods,
blessed with a beautiful language.
Since the days of yore it has been said,
and we people of today believe ,tis true..
...
諸々の
大御神たち
船ノへに

(反して、ふなのへにと云ふ)

導きまをし

天地の

大御神たち

大和の

大国御魂・・・

帰らむ日には

また更に

大御神たち

船へに

御手打ち掛けて

黒縄を

延（は）へたるごとく

あちかをし

千夏（ちか）のサキより

大伴の 三津の浜辺（はまひ）に

直泊（ただは）てに

御船は泊てむ

つつみなく

幸きくいまして

はや帰りませ

Až splníš své poslání

(直訳) 使命を果たして、

a budeš se vracet domů,

帰国に向かわれる間、

mocní bohové opět uchopí

力に富まれる神々は

příd' tvé lodi do vznešených rukou

汝の三船の舳先を手にとられ、

a povedou tě přímo do přístavu jak

po černém laně napjatém z mysu Čika

až na břeh posvátné zátoky Ótomo.

丸でチカの岬から大伴の浦まで張った黒縄のように

あなたを港に導かれることになる。

Šťastnou cestu a brzký návrat!

無事の旅をお祈りする、早く帰りませ!

The gods who guard both land and sea

will keep you safe,

piloting your vessel at the prow,

And when you return,

they will guide you all the way again
straight past Cape Chika to Ohtomo Beach.

...

896

...V mžiknutí oka
(直訳) …瞬きとともに
mění se tento svět
世の中は覆され、
a trvání lidských řádů
人間界尋常の道理が成り立つ期間は、
je kratší než lokýtek...
肘を伸ばすよりも短し。

897

たまきはる
うちの限りは・・・
平けく 安くも
あらむを
世の中の憂けく 辛けく
いとのかて
痛き傷には辛塩を
注くちふがごとく
ますますも
重き馬荷を
表荷打つと
いふことのごと
老いにてある
我が身の上に
病いをと
加へてあれば・・・
Přál jsem si,
aby lhůta mého života, plodného duchem,...
proběhla v míru a pokoji,
bez velkých zvrátů a neštěstí.
Ale naším údělem na tomto světě
je zármutek a strádání.
Jako když nasypou
palčivou sůl do otevřené rány,
už tak dost bolavé,
jako když přihodí břemeno
na záda koně, jenž už

padá pod těžkým nákladem,
k útrapám starého těla
se přidala choroba..
(直訳：心の活気に満ちた
人生を送るうちは、・・・
平穩に、安樂にありたいものだ、
無事に、災いもなく暮らしたいものだが、
世の中でも特に嫌なことと、辛いことは
そのままでも
我らの運命で、
苦しいものだが、
痛む傷にはさらに
辛い塩をふりかけたように、
重い馬荷にはさらに、
重い荷物を載せ加えたように、
重いものは積み重ねたように、
さらに病気も
加わった・・・)

Ho:
All of us wish to live in peace,
but such is life, and sometimes woe
comes after woe as salt is put
on the abraded skin..

(俗道の変化は
撃ち目の如く、
応報が来るまでの距離は、
肘を伸ばすが如し。)

904 (山上憶良)

Smrt vlastního dítěte
(亡くなった我が子を慕う)
世の人の
尊ひ願ふ
七種の
寶を我は
なににせむ・・・
K čemu je mi sedm
nejdražších skvostů světa,
jimž se lidé koří,
a za něž by dali nevím co !・・・

(直訳：「世の人が尊び愛でる

七種(ななくさ)の

宝も

私は何で欲しかろう」)

我が子古日は

・・・共に戯れ

夕星の}

夕になれば

いざ寝よと

手を携はり

父母も

うへはなさかり

さきくさの

中にを寝むと

愛(いつく)しく

しが語らへば

・・・

・・・ Když kvečeru přišel soumrak, říkal :

„Půjdeme spát, “ a bral nás za ruku

s dojemnou prosbou :

“Maminko,tatínku, buďte pořád se mnou,

chci spát mezi vámi jak poupě mezi liliemi. “

(直訳：夕が暮れると、彼は

「寝んねしましょう」といって、

頼んでいた：

「お父さんとお母さんを

割き草のように分けないで、

二人と手をつないで、

真ん中に寝たい。」・・・)

...

思はぬに

横しま風の

につふかに

覆ひ来ぬれば

せむすべの

たどきを知らに

・・・

Najednou z čistého nebe

zadul poryv zlořečeného větru

a všemu byl konec...

(突然晴れた空から

つむじが吹き降りると、

途方に暮れてしまった・・・)

我が腕に持てる 我が子

飛ばしつ

世の中の道・・・

・・・ Dítě, jež měl jsem nosit na rukou,

((常に) 手中で抱き続けると信じた子を、)

取り返しのつかない(ところ)へ飛ばしてしまった。

nechal jsem zmizet v nenávratnu...

(取り返しのつかない(ところ)でなくしてしまった。)

Je tohle spravedlnost světa ?

(これが何だ・・・この世の中の道理・・・)

Ho : With great anticipation I looked forward to his future,

but smitten with an ague, ill he lay...

With desperation I appeal to heaven and earth fore the departed jewel,

but only echoes come back for my cries.

1017 (大伴坂上郎女、後近江から帰る途中で田向山を越

Přešla jsem horu,

k níž spínají ruce poutníci

do hlavního města a nevím,

kde v té pustině složím hlavu.

直訳：都に向かう 詣で人が手向けをする 山を越えたら、どこの荒れ野で

宿して泊まれる？

[訓読] 木綿畳手向けの山を今日越えて、いづれの野辺に廬りせむ我れ

1432 (大伴坂上郎女、柳について)

Kéž bys mi ze Saha přivezl

alespoň snítku zelené vrby,

abychom se spolu těšili její krásou.

直訳：佐保の旅から、青柳の枝だけでも持ってきてくれたらな。ともに鑑賞し、楽しめるように・・・

[訓読] 我が背子が見らむ佐保道の青柳を手折りてだにも見むよしもがも

1484 (大伴坂上郎女)

Nekukej tak nahlas, žežulko!

Když ležím sama a nemohu spát,

je mi tvůj hlas jenom na obtíž! (1484)

直訳：鳴くな、あんな大きな声で、不如帰！一人で寝ると寝られないの。こまったものだ、その声！
[訓読] 霍公鳥いたくな鳴きそひとり居て寐の寝らえぬに聞けば苦しも

1903
Moje láska je jak květ
bílé střemchy,
jež rozkvetla
hluboko, hluboko v horách
a nikdo o ní neví.

直訳：わが恋は白い馬酔木の花のようだ、山の深い深い奥に咲きつつある、人知れずに・・・
[訓読] 我が背子に我が恋ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛りなり

3222
Lidé uctívají horu Mímoro,
na jejímž úpatí kvete střemcha,
na vrcholku otvírají se pivoňky!
Ta hora rozechvěje každé srdce posvátnou básní,
tu budem chránit jak naše plačící děti!

直訳：人が畏まって見守る、見諸の山。(その)麓で馬酔木花が咲き、(その)頂上で椿が花を開いている！
この山だ、畏まって見守る皆の心を しみじみと震わせるもの、これを泣く子のように守り続けよう！
[訓読] 三諸は 人の守る山 本辺は 馬酔木花咲き 末辺は 椿花咲く うらぐわし 山そ 泣く見守る山

3253 Ve sbírce Kakinomoto no Hitomara se říká:
Říše čerstvých rýžových klasů/ na Pláni rákosů/ je zemí, která se řídí úradkem bohů/ a nebere jejich jména nadarmo./ Já však je musím oslovit:/ Bohové, prosím vás,/ vraťte mi milého/ ve zdraví z ciziny,/ ať se sejdeme tak jako dřív,/ vzývám vás tisíckrát/ jak vlny, jež se bez konce/ vracejí k divokým útesům!

3254 Průvodní báseň:
Jamato, náš drahý Ostrov vážek,/ je zemí, již ochraňuje/
duše slov,/ kéž i nadále roste a vzkvétá!

(上記の二首の意義について以下の「纏め」の中で取り上げます。)

4516 (守大伴宿祢家持)

"Jako ten dnešní sníh,
co padá v první den jara,
kéž by se v Novém roce
vršily jen samé dobré věci."

直訳：春の初日に降る 今日の雪のように、新年に吉事ばかり 積もり重なるように。

[訓読] 新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事

対比の纏め — 古代日本文学の「言霊」と「言挙げ」の特徴について

現在の西洋翻訳の伝統は、聖書の翻訳との関連で評価され、聖書翻訳と相まって育ちました。日本の古代・中世の世俗文学の翻訳で見出される用語や表現は、それを先走った聖書翻訳の用語・表現に近いほど、自然であり、分かりやすくなっています。

『万葉集』の十九世紀の英訳者であった F.V.Dickins が次のことを強調します。東洋の用語とは表面的にしか類似しない西洋の用語・概念の紛らわしい点を意識し、不適切な置き換えに極端に注意しなければいけません。

しかし、古い時代に使われた用語を新しい文脈で「リサイクルする」際に、この用語が新しい文脈にぴったり合い、原文と同じく明瞭であるかどうかを確認する必要があります。

また、古代ヨーロッパの多神教の環境で育った哲学や文学への関心はルネサンス時代に復活し、多神教時代の作品も大勢現代語に翻訳されるようになりました。この古典翻訳の経験は近世・近代の東洋文学やアフリカ・アメリカの文化伝統に支えられた作品の翻訳のためにも大いに役立っています。

それぞれの文化の古いタブーとその異なり方をより明確に意識して理解した今、時代の要求にあったような、古典作品の新しい翻訳が求められています。

古代神道に基づく「言霊学」では、「よいことば」を唱えることは「よいこと」をもたらすとみられますが、西洋の一神教では、神、天子や貴人の名は平安時代の本名、あるいは古典漢文における「諱（いみな）」のようなものであり、不適切な人の口の中では、対象地域を越境し、時代を越境する翻訳を目指すときは、様々な偏見を克服しなければなりません（補 C）。異国や異なる時代の文化は不可解であるのではなく、各国の文化には様々なタブーがあり、これらのタブーを正しく理解することによって、両文化間の相互理解は深まり、より正確な翻訳が得られます。

たとえば「言挙げ」の言及（柿本人麻呂の 894 番歌「志貴島の日本（やまと）の国は 事霊の佑（さき）はふ國ぞ 福（さき）くありとぞ」（三二五三番歌、作者不明）や「言霊」の言及（葦原（あしはら）の瑞穂（みづほ）の国は 神（かむ）ながら 言挙（ことあ）げせぬ国 しかれども 言挙（ことあ）げぞする 作者不明、三二五四番歌）は、多神教の発想に言及する聖書の文段の翻訳や、古代西洋文学の近世・現代の翻訳を参照し、適切な訳語を模索することができます。

古い時代に使われた用語を新しい文脈で「リサイクルする」際に、この用語は新しい文脈にぴったり合い、原文と同じく明瞭であることを確認する必要があります（補注参照）。

例は、次に挙げた歌の翻訳と原文の対比から読み取れます。

万 894、山上憶良：「…虚見通 倭國者 皇神能 伊都久志吉國 言霊能 佐吉播布國等 加多利繼 伊比都賀 比計理…（空見つ 倭の国は うつくしき国、言霊の さきはふ国と 語り継ぎ 言ひ使ひけり）」

Od času bohů, (直訳) 神の代より、

z pokolení na pokolení 代々に
předáváme si víru, 次の信仰を伝え続ける。
že říše Jamato je zemí 倭の国は
božských vládců, 代々の皇命の国であり、
šťastným místem pod ochranou duše slov.
言霊に守られる恵まれた国。
次に、上記の人麻呂作の三二五三番歌があり、その中に次の言葉があります。

．．．

Říše čerstvých rýžových klasů na Pláni rákosů je zemí, která se řídí úradkem bohů a nebere jejich jména nadarmo (直訳：葦の瑞穂の原は、神のご判断に従い、神の名を妄りに挙げない)。Já však je musím oslovit (でも、私が挙げることにわけがある．．．)

その返歌の三二五四番歌に次の言葉があります。

．．．

Jamato, náš drahý Ostrov vážek,
je zemí, již ochraňuje
duše slov, kéž i nadále roste a vzkvétá!

(直訳) 倭の国、いつくしい秋津の国で、
言霊に護られる国、
益々成長し、栄えるように。

万 3254

締めくくりの考察

明治期における海外分化優先の立場から、古典日本語では著しい社会的階層性、言語選択に対する「差別」、「神・君主に対する冒瀆」の他、通常で共通の「禁止語」の存在は時代遅れの事象として疎まれました。

しかし一方、西洋ではこのような現象は近代前期までに強く残り、日本では「神の世界」と「人間の世界」との境目は上代の神話の成立以来緩和され始め、人間の心を中心とした神話、物語や記録文学はすべて古代文学に遡っています。

「先進文化」や「先発近代化」などのような、片側にとってのみ好都合の姿勢を超えて、今日にあらうような翻訳法の新たな可能性を探り、個々の文化間の「長短」の相補を求めましょう。

注

- (1) トマス・マッコリー (2010) 「源氏物語英訳における各種アプローチの比較考察」『世界の中の普遍性と現代性』臨川書店。
- (2) Gutenberg J.(1454 ?) *Das Bibel*. Mainz.
- (3) Nábělková, M.(2016) “The Czech-Slovak Communicative and Dialect Continuum: With and Without a Border. The Palgrave Handbook of Slavic Languages, Identities and Borders”.
- (4) J.Nekvapil,etc.(2009)*Mnohojazyčnost v České republice*.Karlova univ. pp.140-184.

- (5) チェコ人のDNAやミトコンドリアの解析 (Česká národní geografická database にありますが、調査はまだ進行中で、一部のデータはチェコのマスコミなどでアクセスできます)。
- (6) 担当人の新聞インタビューに基づいています。
- (7) Boii 族や Wolki 族についての史料は断片的ですが、Titus Livius 著の『Ad urbe condita libri(ローマ成立以降の歴史書全集)』、Strabo 著の『Geographica (地理学)』また、ガイウス・プリニウス・セクンドウスの『博物誌』がこれに言及しています。
- (8) Halstatt 文化と La Tène 文化においては、ケルトの階層が含まれるとみられます。"Celtic Languages". *Ethnologue*. Retrieved 9 March 2010.
- (9) König, Ekkehard; van der Auwera, Johan (1994). *The Germanic languages*. London: Routledge.
- (10) Pokorny, J. (1959), *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch*. Publisher Bern.
- (11) Třeštík, D. (2003) *Mýty kmene Čechů*. (『チェコ族の神話』) Praha : Lidové noviny.
- (12) 中欧ボヘミア、Černošice 村付近。
- (13) Cunliffe, B. (1992) *The Celtic World*, Constable; New.
- (14) 本来、ケルト族の女神 Li Ban. MacKillop, J. (1998), *Dictionary of Celtic Mythology*. Oxford: Oxford University Press, pp. 205, 297, 320, 383-4, s.v. Fand, Lí Ban, Mag Mell, Serglige Con Culainn.
- (15) ウクライナの Libid 川。
- (16) 『П о в ъ с т ь в р е м е н н ы х ъ л ѣ т 』. ネストル著と伝えられる、キエヴァン・ロシアの年代記、遅くとも十二世紀成立。
- (17) Poznámka k článku „O původu jména Čech “. *Slovo a slovesnost*, ročník 6 (1940), číslo 2, str. 104-107.
- (18) 高橋崇 (1986) 『蝦夷——古代東北人の歴史』、中央公論新社 [中公新書] .
- (19) 縄文・弥生時代の移入と日本列島の形成については、『縄文文化』 勅使河原彰 新日本新書 1998年6月、平朝彦『日本列島の誕生』岩波書店 (岩波新書) .
- (20) マルティン・ヘンゲル (Martin Hengel) (2005) 『キリスト教聖書としての七十人訳—その前史と正典としての問題』 土岐健治、湯川郁子訳、教文館。
- (21) H. A. G. Houghton (2016) *The Latin New Testament: A Guide to Its Early History, Texts, and Manuscripts*. Oxford University Press.
- (22) Wulfilla (Ulphilas, Orphila)(311-383) ゴート人の司教。カッパドキア出身のギリシャ人で、両親と一緒にゴート族に捕虜されました。元はゴート族の奴隷でした。彼のゴート語訳聖書はプラハで保管されていましたが、三十年戦争のスウェーデン侵入以来、スウェーデンに保蔵されています。
- (23) Kelly, J.N.D. (1978), *Early Christian Doctrine*. San Francisco: Harper Collins.
- (24) Bořivoj I.(852-889) 最初の歴史的に守名されたボヘミアの公。
- (25) Havlík, L.E. (ed.) (1967) *Magnae Moraviae fontes historici* II. 1. vyd. Brno: Universita J. E. Purkyně v Brně - filosofická fakulta, s. 57 - 60.
- (26) 古教会スラヴ語による『聖ヴァーツラフ伝』が二つあり、10世紀に遡るといわれるが、特に、第二の『聖ヴァーツラフ伝』がロシアで二十世紀の始めに発見され、成立時は不明である。
- (27) キリスト教会では神の一体三位、特に神の子と聖霊の関係の本質についての論争が進み、一〇五四年、キリスト教会はローマとコンスタンティノポリスとの間に大分裂することになった。これによって、欧州の文化圏は東西に分裂しました。
- (28) ローマ・カトリック教会の教皇聖グレゴリウス七世 (在位一〇七三～一〇八五) が神聖ローマ帝国

の皇帝ハインリヒ四世と叙任権について争い、教皇庁の権威を高め、その政治的な影響力を強化しようとした。チェコ国家の成立については、藤井真生（2014）『チェコ中世国家の誕生』株式昭和堂参照。

- (29) サーザヴァ (Sázava) 修道院 (Sázavský klášter) は、聖プロコピウスが活躍した中ボヘミアの修道院である。
- (30) インノケンティウス三世（在位一一九八～一二一六年）は虚構による皇帝の選出を求め、さらに虚構の権威を高めました。
- (31) 第二次世界大戦中、ドイツによる占領の時代にエマウス修道院 (Emauzský klášter) の修道院士たちがナチの収容所に収容され、修道院は戦火により破壊されました（現在復帰しています）。
- (32) 一九九九年、教皇ヨハネ・パウロ二世はヤン・フスの残酷な死刑を批判しましたが、フスの協議はすべて認められたものではありません。
- (33) 両形色の聖体拝領は、普通の信者もミサの間にワインを飲むことを含みます。普通の信者がワインを飲むことは、聖職者との差別を克服するという意味があったようで、いわゆるチェコ式宗教改革への第一歩でした。
- (34) Fiala, K.(1992) "First Contacts of Czechs and Slovaks with Japanese Culture." *Japan Review* 1992.1.1. Kyoto:Nichibunken,020-029.
- (35) エセー Oktábec, K.(2016) "Poslední bitva třicetileté války (Omyl učitele národů)" ホームページ <http://Valka.cz> によると、出国を余儀なくされたボヘミア教団教会に司教で、世界的教育学者でした。J.A.Komenský は（コメニウス）は、ハプスブルク朝による再カトリック化に対し、プロテスタントのスウェーデン軍に期待を掛けていましたが、スウェーデン軍は掠奪を重ね、プラハ住民の決断力ある抵抗に合いました。
- (36) この時代のプロテスタントに対する弾圧についての日本語訳された文献は、Jirásek, A. *Temno*（アロイス・イラーセック『暗黒』、浦井康男訳。成文社 2016）です。プロテスタントの立場に立つ小説ですが、名作で、多くの史料を調べたチェコ文学のクラシックです。一方、日本におけるカトリック宣教師の受難については、名作の小説 Durych J. *Služebníci neuziteční*（『とるにたらぬ下部』）、初版 Praha:Vyšehrad と Melantrich,1940。再版 Lisle-Řím（ローマ）: Křesťanská akademie,1969。
- (37) チェコ民族の再生運動については、石川達夫（2010）『チェコ民族再生運動研究』岩波書店参照。
- (38) カレル・フィアラ「コスマス年代記と古事記」三谷賢二編『BETWEEN NATIONAL AND REGIONAL』所収、大阪大学とカレル大学、2012、020-029 頁。
- (39) Karbusický, V. (1995) *Báje, mýty, dějiny: Nejstarší české pověsti v kontextu evropské kultury* .Praha:Mladá fronta.

補注

A.Ch Chamberlain,B.H.(1882) *A translation of the "Ko-ji-ki" or Records of ancient matters*. Yokohama,Japan. R. Meiklejohn and C. Printers.

Fi Fiala,K.(2012)*Kodžiki* 『古事記』（チェコ語訳）、初版 .Praha:Ex Oriente.

Ph Philippi, L.(1968/1969). *Kojiki*. Princeton. N.J.:Princeton Univ. Press and Tokyo. Univ. Of Tokyo Press.

He Heldt,G.(2014)*The Kojiki.An Account of Ancient Matters*. N. York:Columbia Un. Press.

B. ウズベキスタンの故辞でも鶴は川、湖あるいは海の底から神聖な物質を取るという神話がある。

C. 聖書の翻訳でも、従来の多神教の語彙は新しい意味に宛てられて用いられています。つまり、このことも見習うことができます。例：次の語彙は多神教の時代にも Theos (ギリシャ語) = Deus (ラテン語), Bogъ (教会スラヴ語), Bog (現代ロシア語、現代ウクライナ語、ポーランド語)、Bůh (チェコ語), 神、主 (日本語); Kyrios (ギリシャ語) = Dominus (ラテン語), gospodъ (古教会スラヴ語), Hospodin (Pán) (チェコ語), 主 (日本語); logos = lexis, slovo, (み) 言葉 等々があります。

キリスト教では、神の名を唱えることは十戒のうち、次の第三に基づき、「冒瀆」とされています。

(モーセスの) 十戒の三番

神の名をみだりに唱えてはならないこと。

チェコ語訳ヴァージョン：

Třetí přikázání

Nevezmeš jméno Boží nadarmo.

英訳ヴァージョン：

Third Commandment

Thou shalt not take the name of the Lord thy God in vain.